

集団食中毒事件簿#1 私立一貫校編

できすとりん

プロローグ

どうしてこうなってしまったのか、私には分かりませんでした。

「いい加減出てきてっ!! ちょっとで良いから代わってよおっ!」

目の前の扉が何度も振動し、その向こうから叫び声が聞こえます。

——ブッビィィィィッ! ビヂビヂビヂブウッ!!

両隣からは、恐ろしいほどに激しい排泄音が、絶えず聞こえます。

ブジュルルルブビビブチュブチュブリリリィィッ!!

そして自分のお尻からもまた、同じ音がするのです。

「ごめんなさい……まだ、お腹が、いたくて……」

顔も、名前も知らない誰かに謝りながら、私は。

ひたすら、糞を、ひり出し続けました。

第一部 日常

1 午前七時二十九分

駅から歩いて数分ほどの便利な立地にある大型の高層マンションの一室にある、一畳とほんの少しの広さしか持たない空間。玄関からほど近く、けれどもこの居住区域の中で唯一、鍵を備え付けた扉によつて区切られたスペースの中には、人間の生活になくはならない、一基の洋式便器が置かれている。

その便器に数分前から腰掛け、しきりにお腹をさすっている少女が一人いた。令和の時代では少し珍しい制服であるグレーの吊りスカートを身にまとい、けれどもその布地の大半を捲り上げて太腿の上に乘せている彼女は、紛うことなき排泄中の姿であつた。

「んんんん……！ うーんっ……」

彼女——高坂茉莉は、数駅離れた名門の中高一貫の女子校に通う高校二年生。一流校とまでは呼ばれなくとも、首都圏の中学受験において相応の競争を勝ち抜いた女子だけが入学を許される学校に通い始めて五年目に入る彼女の所作は、立派な女子高生そのもの。

落ち着いた様子でゆっくりと下腹に両手を添えた茉莉は、やや苦しげな表情を浮かべながら体を前に倒す。スカートの更に奥で便器の底を捉えていた肛門が、身体全体の動きに呼応して開かれた。

ぶばばばばばばぶりぶりっ！ ぶつぶう……っ！！

直後——その風貌からは想像もつかないような激しい放屁の音が響く。少量の尿が溶け出したことで薄黄色に変化していた便器の中の

水が、放屁の風圧によつて波立つ。トイレという狭い密閉空間が、強烈な腐卵臭に包まれる——いや、トイレの中の悪臭は、この放屁よりも前から既に漂っていた。

「もうちょっとで、出そう、なのに……っ」

高坂茉莉は、便秘に苦しんでいた。最後に排便をしてからは、ちょうど丸四日が経過しようとしている——重症の便秘ではない。けれども決して無視することのできない重量感が、下腹に残っている。

朝食後に感じた僅かな便秘の兆候を見逃してたまるかと言わんばかりに、茉莉はトイレに籠もっている。籠もり始めてからはもうすぐ一〇分が経過しようとしていた。その間に繰り返された放屁は大小合わせて一三回。腸内に残っていた気体をあらかた出し尽くしたが、代償としてようやく茉莉の直腸には、大便が降りてこようとしている。

四日分の質量がゆっくりと移動し、内側からの力で肛門をこじ開けようと試みる。あと二度ほど息めば、肛門が最大限まで開いてその内側から焦げ茶色の物体をゆっくりと押し出すことができるだろう。茉莉は改めて腹に手を当て直し、体をより一層前に倒すことで臨戦態勢を整える。ピンク色の肛門がにわかにすばみ、嵐の前の静けさのように出口が閉じきる。

（やつと出る、四日ぶりのウンコが……ッ！）

大きく息を吸い、肉の門を思い切り開こうと腹筋に力を——

「ふうう……」

——コンコンコンコンッ！

「——うううっ!? 沙莉？ なに……?」

けれどもその試みは、眼前の扉の細かな振動によつて遮られる。

「なにい？ ……じゃないって！ いつまでトイレ使ってるの！ 私ずっとうんこ我慢してるんだけど!!」

——繰り返すが、彼女の住む家にある便器は、茉莉の足元にある洋式便器一基を除いて存在しない。それはつまり、茉莉以外に便器を欲している高坂家の人物は便器にありつけるはずもなく、その間ずっと我慢を強いられているということ。その筆頭——茉莉の二つ下の妹、高坂汐莉は、茉莉が自らの大便をひり出すべく格闘している間ずっと、自らの尻穴から今にも飛び出しそうな大便を必死に体内に押し留め続けていた。

「そりゃ、分かるけどもうちよつと我慢できない？ 今日はおそうだからもうちょつと頑張ってみたいんだけど」

対する茉莉にも、やむにやまれぬ事情がある。四日分の大便は既に出口のすぐそばまで押し寄せ、肛門は今にも開かれそうになったところだった。今はかろうじて閉ざされている肉の門に少しでも隙間が生じれば、その奥にある焦げ茶色がすぐに顔を見せることだろう。

「無理だって、もう五分くらいずつと待ってるんだけど！ お姉ちゃんさつきからずつとおならしかしてないよね？」

けれどもやはり、便秘の姉よりも、快便な妹のほうが切実にこの洋式便器を欲しており、そして追い込まれていた。茉莉自身も、既に一〇分近くこの場を占拠している分だけ罪悪感がある。下腹にもう一度力を込めたい感情を押さえ、そしてお腹には全体に広がるムズムズとしたむず痒さを覚えながら、茉莉は渋々腹から手を離れた。

「分かったってば……。拭いたら出るから、待ってて」
ウォシュレットを起動して臀部を洗浄するも、特段洗い落とすべき

固形成分はどこにも付着していない。停止のボタンを押すとペーパーを折り畳み、臀部に押し当てて水分を拭き取る。立ち上がった、やはり一切の濁りの見えない水面を一瞥した後に、茉莉はショーツを穿き直しながらスカートを払った。



（お姉ちゃん早くしてっ……どうせ出てないんだからウォシュレットなんていちいち使わなくても良くない？ うんこしたい……!）

ドアノブに赤い印を浮かべた木製の扉の前で、汐莉はずつとばたばたと小さく足踏みを踏むと同時に腹をさすり、そしてスカートの奥で尻の穴を締め上げていた。もうすぐ六分に差し掛かうかという我慢には徐々に限界の色が見えはじめており、中学三年生という年齢には明らかに不釣り合いな、大便を漏らすという最悪の結末すら可能性を消しきれなくなりつつある。

ゴロロゴログウウウウギルギルギル……ッ

下腹から響く音は至って健康的なものであり、汐莉の大腸の中には程よく水分を吸収された大便が鎮座している。下痢便に比べれば格段に我慢しやすい固形の大便であるが、しかし、だからこそ尻の穴には内側から強烈な圧力が掛けられている。汐莉の肛門は、徐々にその役割を果たしきれなくなりつつあった。

グギウウッ……ぶびっ！ ぶつぶう~~~~っ！

（やばっ、くっつき……。お姉ちゃんまだなの……?）

気の緩みから生じた隙間を通り、直腸の中に溜まっていたガスが音

を立てながら外へと漏れ出す。ほぼ同時に響いたトイレからの水音によって放屁音を聞いた人間は沙莉本人を除けば誰もいなかったが、しかし彼女自身の体に纏わりつくようにゆっくりと上昇する熱い気体は、何よりも雄弁に沙莉のしてしまった行為を物語る。

直腸の先端部分に溜まっていたガスが外に出ると、その奥に鎮座している固形が、蠕動運動の流れに従いながらゆっくりと出口に向かって移動を開始する。直腸という壁越しに伝わる、質量感を持った圧力を感じ取った肛門括約筋が、強く緊張した。

(うんこ、漏れる……っ！ お、お姉ちゃん水流してるよねっ!?)

尻の穴を開かんとする内側からの圧力と、尻の穴を閉じようとする肛門括約筋の圧力が拮抗して、肛門が小刻みに震える。その出口がいつ陥落してもおかしくない状況にまで追い詰められた沙莉にとって唯一の希望は、目の前の扉の向こう側から聞こえてきている流水音のみだった。ドアノブが浮かべている赤色が青色へと変化する瞬間を、今か今かと待ち続ける。

だが、その瞬間は中々訪れない。水が流れ終わり、トイレに再び静寂が戻り始めてもお、姉の茉莉は鍵を開けてくれない。

「ちょっとお姉ちゃん、早く、して……っ!」

「ねえ沙莉、やつぱりもうちょっと我慢できたりしない？ お腹ムズムズしてるから頑張りたいんだけど……」

「無理無理むりっ！ うんこ漏れそうなのっ!」

「むう……」

沙莉の苦しい叫びを聞いて、およそ九分間にわたって閉ざされ続いていた扉がようやく開く。渋々といった表情で中から出てきた茉莉

は、まるで腹を下した女子のように下腹をさすっていた。

「沙莉、私もウンコしたいままだから急いでね……?」

「どの口が言うのよ、どの口が……っ！ 漏れる漏れるっ!」

ようやく姉が明け渡してくれたトイレの中に入れば、沙莉の目の前には待望の洋式便器がある。換気扇が常時稼働していたとは信じがたい悪臭に満ちた狭い空間には、固形物ではないながらも確かに「腹の中身」を出した姉の痕跡が残っている。

身体を九〇度横に向け、便器に向かって尻を突き出せば沙莉の念願の瞬間はもうすぐそこだ。制服のスカートの手を入れ、やや幼気なリボンの付いたピンク色のショーツを下ろし、便座に腰掛ける。震え続けていた肛門がその動きを止めたと同時に、トイレの中に勢いの良い放屁の音が響き渡る。

ぶびぶびぶぶぶ……ぶすぶりっ！

ガスの噴出が止まるのは即ち、出口である穴が別の固形物によって塞がれたという合図。粘着質な音を響かせながらみるうちに拡げられていく肛門から、焦茶色の大便がゆっくりと水面に向かってその長さを伸ばしていく。

ブボボッ ブウーッ ブチブチブチブチブチッ!

ぶりりりり みちみちみちみちちちちちちちっ!

気持ちの良い排便が始まってしまえば最後、扉の外にいる姉の存在すらも、意識の俎上からは外れてしまう。一五歳という年齢に比べればいささか幼気な声を漏らしながら、沙莉は肛門に力を込めて出口たる肛門を拡げていく。抵抗のなくなった大便が、自重によって下へと移動して下端が水面に触れる。

野太い大便はそれでもまだ千切れない。汐莉が一度息を吸い直し、けれどもその間もずっと下腹から消えることのない排便欲に駆られ、再び尻の穴が震えながら開けば、尻から伸びていた大便はするすると水面の下へと吸い込まれていく。

ニチニチニチチチチチチチブリュツ!!

「んっん~~~~っ……! はあ、あ~~~~っ」

我慢の末の排泄は、快感そのものであった。洋式便器の中でぐるりと楕円を描いている焦茶色の大便は、太さにして一センチ八ミリ、長さにして二・四センチ。一般的な中学生の腹に詰まっているにしてはやや体積の大きい大便を出したばかりの尻の穴は、未だに余韻に浸るかのように震え続けている。

(結構大きいんこが出た……すつごく気持ちいい……って、いうか) グギユウウウウッ……ゴロゴロッ、グルルッ！

（まだ、出そうなんだけど……）

普通の朝であれば、汐莉も座り直して壁にあるウォシユレットのボタンに手を掛け、ほとんど汚れの付着していない肛門に水流を当てて全ての汚れを洗い流しているはず。実際に、汐莉も一瞬は下腹から手を離し、身体に染み付いた行為を始めようとする。

——けれども今日だけは、事情が違った。

「汐莉ウンコ終わった？ 終わったら早く出て……」

「まだ無理っ。もうちょつと出そうだから待っててよ……」

大腸がゴロゴロと音を立てながら蠕動を繰り返し、排泄欲求だけが際限なく高まっていく。けれども一度空になった直腸がすぐに重くなることはなく、汐莉の尻からはガスが漏れ出るのみ。

腹を押さえながら、尻の穴をゆっくりと開閉する。身体の内側から湧き上がる欲求に引つ張られて息み続けているとようやく、蠕動運動の波が直腸へと到達する。ぎゅるつ、という振動が鼠径部から発せられると同時に、汐莉の感じる腹痛がにわかに強まる。

(うんこ、降りてきた……つ。二回目の、うんこ……)

「汐莉早く、ウンコしたい……」

扉の向こうから聞こえる姉の言葉を耳に入れないながらも、排泄はもう
汐莉の意思だけでは止められない。一度は起こした上体を再びゆつつか
りと前に倒し、下腹に両手を当てながら力を込めた。数秒前までの規
則的な肛門の開閉が止まり、中央部の皺を押しつけるように、茶色の
塊が顔を出す。便器の中に沈んでいる焦茶色の塊に比べれば色は明る
く、表面は極めて滑らかだった。

「んっ、う~~~~んっ……………んんっ！ はあっ」

ブリブリブリミチチチチチチツ、ブチュツ！

一度目のものに比べれば太さも長さも一回り小さい大便是、しかしそれでも同年代の女子の毎朝の排便として標準的な大きさを誇っている。軽くなったお腹を小さくさすり、下腹に残っていたほんの小さな違和感を出し切れば、それで汐莉の排泄は終わりだった。

ブ
ウ
ウ
~~~~  
~~~~  
~~~~  
ツ！

ぶ  
つ  
す  
す  
す  
す  
す  
ぷ  
り  
っ！

(うんこ、いっぱい出た……結構におうかも……)

乾いた放屁を二度繰り返すと、汝莉の肛門は今度こそ満足したようにゆつくりと萎んでいき、元通りの光景を見せる。茶色の汚れたほとんど付着していない皺は、彼女のひり出した大便が極めて健康的だったことを何よりも物語っていた。

(ここまで気持ち良かったうんこ、久しぶりかも……)

重かったお腹と、想定外に長時間となつてしまった我慢。それらを乗り越えた先にあった排泄は、今までにないほどの快感を汐莉にもたらした。けれども、その快感にいつまでも浸っていることはできない。個室の外からは声こそ聞こえないが、茉莉がずっと足踏みを繰り返している物音が響き続けていた。普段はマイペースを具現化したような人間で、焦っている様子など全く想像のできない姉が、朝の便意によつてここまで追い込まれるとは、汐莉も思いもよらない。

(ちょっとだけ、急がないと)

汐莉は起動したウォシュレットをすぐに止め、トイレトペーパーを巻き取る手を急がせた。



「ウンコしたいうつ、ウンコ出る、ウンコ出る……」

ぶりっぶりぶりぶりぶうつ！ ふしゅうつ！

細かく足踏みを繰り返しながら、その豊満な臀部を遠慮なく後ろに突き出した茉莉は大便を我慢していた。出口のすぐそばまで押し寄せてきている大便の質感は凄まじく、肛門が内側からの力によつて勝手に押し開けられてしまうのではないかと思うくらいである。

たった四分間——茉莉に代わってトイレに入った汐莉が排便していたその短い時間の間に、茉莉の状況は大きく変化していた。座っている姿勢から直立姿勢に変わったことがあって刺激になったのか、今の茉莉の大腸は激しく蠕動を繰り返している。大便を下へ下へと動

かそうとする波によつて、茉莉の腹の中で丸々四日間以上かけて生み出された大便が、出口へと到達してしまつた。

(汐莉、お尻拭き終わったかしら……あと、ちょっと……)

身体をよじり、尻を後ろに突き出した茉莉が、ばたばたと足踏みをしながら必死に便意を我慢している。制服のスカートの上からお尻を押さえれば、もう肛門のすぐそばに固形の何かを感じる事ができる。それくらいに茉莉の便意は切羽詰まっていた。

トイレの中から聞こえていた機械音が止まり、カラカラとペーパーを巻き取る音に変化する。汐莉が後始末をするための十数秒間が茉莉にはとてつもない長さに感じられた。睨むように見つめる扉の先から響く、紙を臀部に押し当てる音、下着を穿き直す衣擦れの音、そしてトイレの水を流す音——全てを聞いた茉莉の視界で、ついに錠前の示す赤色が青色へと変化する。

もうすぐ排泄ができる。茉莉の脳は短絡的に肛門を開こうとした。

ブビビィィッ！ ブップブプリリリ、ビヂ……ッ！

「あつ、待つて待つてつ、まだ、あつ」

扉が開かれ、四分前とは打って変わって気持ち良さげな表情を浮かべた汐莉が扉の先から現れる。けれども茉莉が見つめているのはそんな妹の姿ではなく、その向こうにある洋式便器。

大便をするための場所、であつた。

「お姉ちゃん、大丈夫……?」

「ごめん汐莉っ、どいて!」

今度は、茉莉がトイレに向かって突進する番であつた。まるで妹の行為を再演するかの様に狭い空間の中に駆け込んだ茉莉は、右手で

扉と鍵をしめながら、同時に左手はスカートの中に突っ込んで下着を下ろそうとする。鍵のかかった金属音を聞くとすぐに右手を臀部に差し向けて、スカートを大きく捲り上げると、顕になったライムグリーンの下着を膝上までずり下ろした。我慢のために後ろへと突き出され続けていた豊満な臀部の形が、より一層強調される。

後は便器に腰を下ろすだけ——丁寧に汐莉が閉じた便器の蓋を再び持ち上げ、ようやく茉莉の排泄の準備が整う。身体を横に向けて座り込んだ茉莉の尻からは、もう既に焦茶色の大便の先端部分が出かかっていた。

ゴロゴロゴログルルルルル~~~~~~~~ッ!!

茉莉が排泄の体勢を整えたことを感じ取ったかのように、大腸が最後の咆哮を行う。次の瞬間に強烈な腹痛に襲われた茉莉の理性には、もはや本能に抵抗する術は残されていない。

「ふうううう……っ！　んぐ、ううっ……!!」

瞬間に尻の穴が広がっていき、その中央からは焦茶色を超え黒色に近い大便が顔を出す。砂漠の地面のように割れた表面からは、長時間の発酵によって生み出された臭気が発せられており、まだ排便が始まっていないにも関わらず、茉莉の周囲に硫黄泉のようなにおいを広げていく。

ブスススウ~~~~ピッ！　びちっ、みぢぢ、ぢっ

僅かに放屁の音が鳴り響いたと思えば、すぐにその音は止まり、代わりに粘着質な音がゆつくりと響き始める。茉莉ひとりにしか聞こえない程度の小さな音でありながらも、肛門が広がっていくその音には、確かな存在感があった。

(硬いっ……痛いっ……)

肛門の粘膜が、許容の限界を超えて広がることを求められる。開いたばかりで赤く腫れ上がった出口を、表面の固くなった大便が通り抜けていく——痛覚を刺激しないはずがない。それでも茉莉は、その痛みを超える快感に抗うことができなかった。

(でも、四日ぶり……やっつと、出る……っ！)

メリィッ……！　ブッ、ミヂヂヂィッ……!!

「んんんっ、うーんっ……!!」

覚悟を決めて息を吸い直す。既に精一杯まで広がりきった肛門は、彼女が四日間溜め込んだ大便を外に出すのにちょうど必要十分な大きさだった。毎秒二センチほどのゆつくりとしたペースで下へ下へと伸びていく大便が、やがて静かに水面の下へと潜っていく。

既に長さにして二〇センチ近く。それでもまだ茉莉の大便は途切れそうな気配を見せない。息を吸うと、そこにはもはや汐莉が残した臭気など残っておらず、茉莉が今ひり出している真つ最中の野太い大便の濃厚な臭いのみが空間に満ちていた。

(もう一回……これで、出し切れる、はず……っ！)

ニチニチニチニチニチ……ッ！　めりめりめりめりめりっ！

一度は窄みかけた肛門が、すぐにまた外側に向かって伸びる。黒色に近かった大便が次第に茶色へと近づいていくと、その分だけ大便には水分が含まれるようになる。大便と肛門が擦れる音が、乾いた擦過音から次第に粘着質な音へと変化する。

大便の伸びる速度が、毎秒二センチから四センチへと加速する。ここまでくればもう、大便が自重で落ちていくのみだった。

「んぐううつ……んぐうんつ！」

メリメリメリッ、ブブブブリリリリリィィィッ！

大便の後端が肛門から飛び出し、水面へと横たわりながら落下していく——水面で水を跳ねさせた大便がパシャン、と音を立てたのが、茉莉の排泄の終わりを告げる音だった。想定外に我慢を強いられ、長時間となった戦いを終えた肛門が、ひくひくと震えながらもゆっくりもとの窄まりへと戻っていく。周囲にはごく僅かに茶色的大便が付着しているのみだった。

お腹の下半分が軽くなった感覚を前に、茉莉の表情もどこか晴れやかなものになる。けれどもその評定もまたすぐに姿を消し、茉莉は訝えない様子で右手をそつと腹に当てた。

（ウンコが出てすごく気持ち良かったけど……なんかまだ出し足りないというか、お腹がスツキリしない感じ。四日間も溜め込んでいたから、まだお腹に残ってるのかしら……）

お腹を擦り続ければ、ギュルリ、と小さな鳴動が腹の奥底から響いてくる。まだ大便が出るのかもしれない。大腸には宿便が一部残されているのかもしれない。願わくばそれすらも全て便器の中に出し切ってから、この場をあとにしたい——

だが、それをする時間は、茉莉には残されていない。

「お姉ちゃんトイレ終わった？　いつもの電車出ちゃうよ」

「うん……今出る……」

時刻は既に七時四〇分を回っている。茉莉の最初の格闘に加え、その直後の沙莉の排泄、そして茉莉の二度目のトイレによって、本来であれば朝に残されているはずの時間の猶予は無いに等しい。

お腹の何処かに感じられる小さな不快感に目をつぶり、茉莉はトイレトペーパーを巻き取る。尻についた僅かな汚れを拭き取った後に立ち上がって振り返ると、便器の中には一周ぐるりと曲がった巨大な大便が横たわっていた。自分の身体からものの数分で生み出されたとは受け入れ難い大きさを誇る大便だった。

現実から目を背けるかのようにレバーを素早く倒し、水が流れていくことすら確認せずに茉莉は便器の蓋を閉じた。手を洗ってトイレを出ると、トイレの前で待ちくたびれた沙莉が茉莉を急かす。

「お姉ちゃん、あと五分で電車出ちゃうって」

「分かったわよ……じゃ、行きましょ」

カバンを持って、二人は姉妹揃って家を出て最寄りの駅へと向かう。家を出るときに、振り向きざま——トイレのドアを見つめる茉莉の表情には、微かな曇りが垣間見えたままだった。

## 2 午前七時四三分

地元の公立小学校を卒業して、私立の中学校に進学すると、生活スタイルは大きく変わると言われている。離れた中学に通うためには電車通学が必須になり、必然的に起床時間は前倒し、尚且つ出発の前に自宅で過ごす短い時間は、忙しないものになってしまう。

それでも——変化しない習慣もまたあるのだと、未だに着慣れないグレーの制服に身を包んだ篠原早織は、そう思うことが多い。

ころころきゅるきゅるくるるるっ

「トイレ、トイレ……っ」と



洗面所での歯磨きを終え、いそいそと身体を翻してトイレの扉へと向かっていく身長一四六センチのやや小柄な身体には、やはりどこかまだ小学生のようなあどけなさが感じられる。一人っ子ということでも誰ともトイレを取り合う必要のない早織は、トイレに入って鍵を掛けると、小さくため息をついた。

「ふうっ。なんかお腹ゴロゴロするなあ……」

便器を見たことで排泄を意識してしまったのか、鈍く痛み始めた腹を数秒さすった後に、早織は便器の蓋を持ち上げる。丁寧に制服のスカートを左手で捲り上げ、頭になった純白のショーツを右手で器用に膝の下までずり下ろす。便器に腰を下ろすと、今度はスカートの中その右手を入れて、下腹をさすり始めた。

お腹に手が当たると同時に、薄桃色の肛門が小さく隆起して震えだす。やがてその頂点にある窄みが開かれ、内側からやや高い圧力の気体が噴き出してくるまでには、そう時間を要さない。

ふうっ　ぶりり　ぶびっ　ぶりり、みちっ

軽快な放屁を終えると、気持ち良さそうにしていた早織の表情が途端に歪みだす。下腹に力を入れ、腹筋で腹の中身を下へ下へと押し出していくその姿は、決して自分以外——親しい友人でさえも、知られたくない姿だった。

「うーんっ。ん~~~~っ」

子供らしさの抜けない、やや大きめの声を上げながら息むと、広がり始めた肛門から茶色の固形物が顔を出す。早織はいたって快便体質であった。ドロドロの軟便を生み出す腸の痛みに悶える必要もなければ、数日に一度しかない便通に悩むこともない。

ただ一日に一度、決まって朝食後に便意を催すのみ——人間として極めて自然な便意でありながら、しかり早織にとつて最も崩すわけにはいかない排便のペース。今日も早織の大腸はいつもと変わらず、一本のバナナ状の大便を生み出して、出口に向かって送り出す。

その出口が最後、本人の意思によって開かれた瞬間に、自宅の洋式便器というあるべき場所へと着地していく。

ぶりぶりぶうっ！　にちにちにちちちちちち、ぶっ、とぼんっ  
「……ふうっ」

毎日繰り返される短い行為でありながら、しかし早織にとつてのそれは大きな意味を持つ。排便行為は朝に、そして自宅で行われなければならない。それは自然の摂理ではなく、理性による強い要請。

(良かった。これで今日も学校でウンチしたくないはず)

およそ一二〇グラムの質量を押し出し、軽くなった下腹に手を当てて、早織はようやく笑顔を取り戻した。排泄の気持ちよさに加え、学校で過ごす数時間につきまとう恐怖——万が一学校で便意を催してしまつたら、という恐怖から逃れた安堵の感情の現れでもあった。

早織が学校での排便を回避するようになって、もう一年以上が経つ。小学校六年生に上がり、周囲の友人たちがなんとなく学校での排便を恥ずかしがるようになり、気づけばそれは忌避するべきものへと変化していた——確かな理由があるわけでもない。だが、だからこそ、万が一その「掟」を破ってしまったらという怖さは、計り知れなかった。

トイレという狭い空間の中には、既に発酵臭が漂い始めている。洋式便器の中に溜まった水の中央に横たわる一本の大便は、別の形で存在感を放っていた。

（お尻拭いて早く流そ……………あれ？）

普段通りトイレトペーパーに手を伸ばそうとした瞬間、早織の手が止まる。何かに納得が行かない表情を浮かべること数秒、ペーパーへと伸ばしかけた右手を、早織は下腹へと戻す。

ぎゅるり、と大腸の一部が小さく音を奏でる。追加の便意を催したわけでもなく、お腹が痛くなったわけでもない。ただどこか、蠕動がおさまっていない感覚と、不快感だけが腹の奥に残る。

（まだ残ってるのかなあ。学校でしかなるとやだし、出し切りたい）  
「うーんっ……………んんんっ、んっ……………はあ」

ブピッ。ブシューウウブピッ、ブリリリッ！ ブスッ

残便感に似たような感覚を覚え、早織は再び腹筋に力を込める。尻の穴が何度も繰り返し開閉して、膨らんだ排泄孔から腸の中身を出し切ろうとする——だが、空を切ったような音が響くのみで、響いてほしかった粘着質な音は響かない。何回息んだとしても結果は同じで、直腸に僅かに残っていたガスが出ていくのみだった。

気づけばトイレに入ってからもうすぐ五分が経とうとしている。朝の時間にも決して余裕があるわけではない。後始末をして学校へと向かわなければならぬ時刻は、すぐそこまで迫っている。

（はあ。これだけ頑張っても出ないってことは……………気のせい、だよな）  
半ば自分に言い聞かせるようにして排泄を切り上げた早織は、改めてトイレトペーパーに手を伸ばす。尻の穴を丁寧な拭き上げでショーツを穿き直すと、大便を一瞥した後にレバーを倒す。

「学校でウンチ……………したくないといいなあ」

少しだけ本音を零しながら、早織は安住の地を後にした。

### 3 午前七時四五分

早織が自宅のトイレに腰を下ろしたのとほぼ同時刻。同じマンションの別のフロアでもまた、同じ制服に身を包んだ少女が自宅のトイレへと足を踏み入れるところだった。

中学一年生の早織よりも学年が三つ上、高校一年生の宮川祥子は、早織よりもやや慌てた様子でトイレの鍵をしめる。彼女もまた一人っ子であり、トイレを争う相手は自宅にはいなかった——実際、彼女は長時間の我慢を強いられたわけではない。

彼女の動作を急がせるのはただ、不慣れた下腹の痛みのみである。  
グギユウツ……………ゴロゴロゴロ、キュルルツ……………！

（お腹痛いお腹痛いっ、なんで急に……………？）

自室で朝の身支度を整えていた祥子は、髪をとかし終えるや否や部屋を飛び出して廊下を駆けていく。下腹に添えられ絶えず左右に動き続けている左手と、我慢という苦行を前に歪んだ表情が、祥子の体調の悪さを何よりも雄弁に物語る。

その腹の痛みは、普段とは比べ物にならないほど強く、そして鋭いものだった。毎朝学校へと向かう前に感じる落ち着いた便意とは真逆の、超特急で下った腹は、腸が捻れるような痛みをもたらしている。腹の中で動き回っている。明らかに固形ではない何かに嫌な予感を覚えつつも、今の祥子にできるのとはにかく、自宅にある便器に座りその腹の中身を余すことなく便器の中へと絞り出すことだった。

ゴロゴロゴロゴロゴロギョル……………ッ！！

「早く、早くしなきゃ……漏れる……っ！」

トイレにたどり着いた祥子は、乱暴に扉を締めて鍵を掛けた。すぐに慌たたくスカートの手に手を入れ、黒色のショーツに手を掛ける。一気に膝の下までショーツをずり下げれば、あとは後ろへと倒れ込むだけだった。着座する寸前に後方のスカートを捲りあげて、祥子は排泄の体勢を整える。

ぶびい~~~~っ！　ふうふうぶぶぶふうっ！

尻の穴が僅かに開くと同時に、直腸の下端に溜まっていた熱いガスが勢いよく噴き出していく。我慢の最中は尻の一発すら漏らさなかった祥子の腹の中には、少なくない量のガスが溜まっている。

けれどもそれ以上に、祥子の大腸では実体を持った大便が暴れ狂っている。強烈な腹痛の原因となっている大便を全てひり出すべく、祥子はスカートごと両手で腹を抱えながら上体を前に倒し、尻を思い切り便器に向かって突き出す。

ブジュウウブリブリブリッ！　ニチチチチチチブリュ！

ブチブチブチミチミチミチミチ、ポシャンッ！

どれだけ腹の中で下痢便が暴れていたとしても、唯一の出口である肛門からは、体内で生み出された順に大便が出て行く。普段の祥子はいたって健康な快便体質であり、直腸の容積の半分以上を占めていたのはバナナ状の固形便。昨日一日かけて生み出された大便は、けれどもほんの少しだけ水分を多く含み、表面に緩い便を纏っているように思えた——実際、尻の穴のすぐそばに押し寄せていた大便をひり出したにも関わらず、祥子の表情は冴えない。むしろ余計に腹痛が強まり、いよいよ苦痛に満ちた表情を浮かべていた。

（はあ、まだお腹の中にウンチ残ってる気がする……お腹痛い）

出口に滞留していた固形の大便が出ていったことで、大腸がより一層活発に蠕動運動を再開する。一度は空になったはずの直腸にどくどくと下痢便が流れ込んでくる振動を感じながら、祥子はただ、迫りくる次の便意の波が顕現するのを待つことしかできない。

お腹をさすること、およそ二〇秒。強烈な下腹から鼠径部にかけての痛みとともに、猛烈な便意の波が祥子を襲う。最初の波よりも強敵に違いない第二波と闘うべく、祥子は再び上体を倒した。

「んぐ……っ！　はあ、ふうんっ……！！　いたたた……」

ブジュルルルルルブビィ~~~~ピチピチピチッ！！  
（どうしよ、完全に下痢じゃん……なんで……？）

自宅のトイレというパーソナルスペースでしか響かせたくない、激しい破裂音が祥子の尻から響く。腹の痛みから想像していた通りの下痢であり、けれどもその下し方は想定を大きく上回る。形の残る軟便よりも遙かに水分率の多い、限りなく泥状の、ドロドロに溶けた下痢便が、祥子の尻から飛び出して便器に着水した。

それでも、この下痢がいつときのものであれば祥子にもまだ救いはあった。だが腹の痛みは一向におさまらず、当然のように排泄行為もまだ終わりが見えてこない。痛む下腹をさすれば、腹腔の奥に控えていた次の下痢便の波が出口に向かって押し寄せ、中身を出し切ったばかりの直腸に新たな大便を装填する。

ビジュルルルウッ！　ブビィッ！　ふう~~~~ぶりっ！

痛みが差し込む暇もなく、最高潮に達した便意が勝手に祥子の肛門を開かせた。溶け切った茶色の下痢便が、太い滝となって便器に向

かつて注がれていく。尻の穴を全開にしている感覚だけはあるが、それでも下腹に残る重い痛みは中々消えていかない。

直腸に再び押し寄せてきた下痢便を絞り出し切るのには、少々時間を要した。腹を擦りながら懸命に下腹に力を込め、何度も尻の穴を大きく開いて茶色の泥水を噴き出していく——その勢いがようやく衰え始めた頃、祥子の腹がごぼごぼと音を立て、腸管に残っていたガスを直腸へと送り込んだ。

プボボボボボボボッ！ プビップリップリプブリプリッ1

「……っ!? うう……っ!」

特大の放屁を二発。洋式便器の中で反響した音は、トイレを超えて廊下に至るまで響き渡るほどであった。家族を含めて誰もこの音を耳に入っていないかったことだけが、祥子の名誉をかううじて守ってくれる。万が一この音を公共のトイレ、特に友人のいる学校のトイレで奏でしまったら——考えたくもないことが頭をよぎる。

(……ここまでお腹壊すなんておかしいよ。もしかしたらなにか変なものでも食べちゃったかな……)

ガスを出したことで腹の痛みが大方治まり、祥子は僅かに上体を起こしながら腹痛の原因を想起する。昨日食べたものを振り返るが、腹下しの原因となりそうな生モノや焼肉の類は、昨日は全く口にしていないはず。

ただ——思い当たる節があるとすれば。

(昨日のお昼、食堂でカレーがおかわり自由だったから……)

食あたりによる下痢で思い当たることはない。けれども食べ過ぎともなれば、明確な原因の候補が一つだけある。

学校の食堂で行われた、年に一度のイベント——カレーライスのおかわり自由。それも珍しく今年はエビ・イカも混ぜたシーフードカレーだったこともあり、おかわりの行列は過去最長のものになった。もちろんその列に祥子が三度も並んだことは、言うまでもない。

(食べすぎたせい……だとしたら、これで出し切っちゃえば治るはずだから……またウンチ降りてきたっ)

「ふう……っ、うんっ、うううんっ!!」

ぶおっぶりぶりぶりりりりびぢいっ！ プビイーッ!!

腹の中に居座っていた残便感も、最後に下痢便を絞り出したことで霧散していく。相応に恥ずかしい音を奏でたものの、トイレに駆け込む前に感じていた強烈な便意も耐え難い腹痛も、今となってはもう全く感じられない。

つまるところ——いつもより時間を掛けて大便をひり出したことで、祥子の腹痛と下痢は治ったように思えた。

(治ったみたいだし……学校休むほどじゃないよね。っていうか、お腹痛いからって学校休むのも恥ずかしい……)

祥子は軽く息を吐いてから、ウォシュレットを起動して尻の穴を丁寧に洗う。附着していた軟便と下痢便をきちんと洗い流した後に、ペーパーで水分を拭き取った。立ち上がり、ショーツを穿きながら振り返ると、自らが生み出した下痢便の海と対面する。

「……うわあ」

思わず声が出てしまうくらいに、足元の便器に広がっている茶色は祥子の想像を超越していた。ひり出した本人ですらも、これほどまでに大量の大便が腹の中に溜まっていたとは信じがたい——中央を貫

く一本の大便と、その周囲には水に溶けた泥状の下痢便が瀉のように広がっている。祥子は自分の腹に手を当てた後に、ほんのりと顔を赤らめて蓋を閉じた。

レバーを倒して、自らが生み出した下痢便ともども全て下水道へと流す。ため息をついた後に祥子はトイレを出て、自室へと戻ると時計を確認した後に、早足で自宅を飛び出すのであった。

#### 4 午前七時五十分

腹を下しても、すぐそこに駆け込むことのできるトイレがある宮川祥子は、それでもまだ恵まれた環境にいると言うことができる。強く便意を催してからトイレに入り、便座に腰を下ろすまでに要した時間は一分足らず——これくらいの時間であれば、よほど酷い水のような下痢でない限り、我慢をすることは難しくない。

だが、そうでない場所では便意を懸命に我慢している女子がまた一人、彼女たちの学校の最寄り駅的女子トイレにいた。

祥子が便器にありついた午前七時四五分よりも更に一〇分前、七時三五分に、その少女——中学二年生の伊藤文乃は、最寄り駅のホームに降り立った。けれどもその表情は晴れやかとはほど遠く、グレーの吊りスカートを纏った腹の奥からは、不穏な振動音が響いていた。

文乃は迷うことなく、コンコースに降り立つや否や真っ先に改札口の脇にあるトイレを目指して小走りで移動を開始する。改札口へと向

かう人の流れに僅かに逆らいながら、文乃は目的地へと到達する。向かって左側にある女子トイレの入口に足を踏み入れた文乃は、しかしすぐに足を止めた。

朝の通勤ラッシュの時間帯は駅の利用者の増加に比例してトイレを利用する人間もやはり多く、女子トイレには入口にまで到達するほどの行列が既に出来上がっていた。最後尾に並んだ文乃はちょうど、トイレの入口に立つ格好になっている。

ゴロゴロロロロググギュルルル……。

(うわ、やつぱり並んでる……今日いつもより列長いし……)

背を伸ばしたり左右の隙間から奥を見たりしながら、文乃は行列に並んでいる人数を数え上げる。個室の入口まで伸びている行列の人数は一名——文乃は二番目。個室が五つしかないことを思えば、短い列とは言えない。

(今まで何度かピンチになったけど、これはキツそう……。でも学校まではこのお腹具合じゃどうやっても保たないし、並ばなきゃ)

けれどもどこか、文乃には冷静さが残っていた。両手で腹を温めて少しでも腹痛を和らげながら、足をピタリと閉じて尻の穴を締め上げる——慣れた姿が物語る通り、文乃は腹を下しやすい体質だった。健康的な硬さの大便が出ることは減多になく、ペースト状の軟便を朝からひり出すのが平常運転である。僅かなきつかけがあれば容易に下痢になってしまう文乃は、登校途中に便意を催し、こうして駅のトイレに駆け込んだ経験も両手では到底数え切れない。

(我慢できるかなあ……。うんちの人は多いかもしれないけど、あんまり下痢してる人がいまいちように……)

文乃が下着を汚すことなく便器にありつけるかは、自分よりも前にトイレを使う先客たちが如何に素早く交代してくれるかに依存する。前方を見渡す限り、トイレの行列の光景は普段とそう変わらないように映った——だが文乃の頭には少しか引つかかる点が残る。

(同じ制服……私以外にも二人いる。ちよっと珍しいかも)

列の前方に目をやれば、特徴的なグレーの制服を纏った生徒が二人確認できる。特段切羽詰まった様子でもないが、やや珍しいように文乃は感じていた。

そして、その偶然が更にもう一人重なる。列が徐々に進み始め、個室が三つ空いたとき——個室から出てきたうちの一人が、やはり同じ制服に身を包んでいた。

(珍しいこともあるね……うう。それよりもうんちしたい)

同じ学校に通う生徒が少なくとも四人、同じ駅の女子トイレにいる。偶然か、はたまた必然か。その結論を出す余裕はどこにもなく、文乃は再びお腹をさすり、お尻の穴に力を込めた。今すぐ漏れそうなまでには追い込まれていないが、一步油断してしまえばすぐに下着の中には茶色が広がってしまうだろう。

列は三人進み、文乃の前には八人が並ぶ。タイミングの問題なのか、それ以降はしばらく動きがなくなってしまった。どの個室で誰が何をしているのかは知る由もないが、女子トイレの中に漂うアンモニア臭と、薄い硫黄のような臭いが、先客たちがしている行為を教えてくれる。閉じられた五つの扉の向こうで、先客は今頃便器に座り、腹の中に溜まっていた大便をひり出しているだろう——それを考えてしまっただけで、文乃の腹もまたぐるぐると動き出す。

(早くうんちしたい……どこも出てこないし、まずいかも……)

我慢を始めてから既に五分近くが経過している。入れ替わっていない二つの個室は、少なくとも五分間、一人の先客がずっと使っている。大便をしている——そして恐らくはお腹を下していると推測することは、さほど難しい話ではなかった。

今の文乃にできることは、ただひたすらに尻の穴を閉め続けるのみ。不穏な音を立て続けている下腹に嫌な予感を覚えつつもじっと待っていると、少しずつだが列が進み始める、一人、また一人と列が進み、先頭に立っていた人間が個室へと入っていく。落ち着いた様子で入っていく女性もいれば、そうでない女性もいる——文乃よりも四人前に並んでいたスーツ姿の女性は、明らかに切羽詰まった様子で駆け込んでいき、乱暴に鍵をかけた。

プリプリプリプリリッ！ ビチビチビチビチーリッ！！

(うわ……今の人のお腹壊してたんだ。時間かかるかな、やだなあ)

文乃と同様に下りきった腹具合と、強いられた長時間の我慢を前に、何よりも安堵感が勝ったのだろう——個室から響いてきたのは破裂音を消すための流水音ではなく、無事に便器へと腰掛けることができたことへの安堵のため息だった。

腹を下した先客が失禁に至らず個室にたどり着いたのは喜ぶべきこと。けれども文乃にとっては全く喜ばしいことではない。埋まったばかりの一番手前にある個室はきつと、しばらくは空かないことだろう。個室が一つ減ってしまえばその分だけ、文乃に順番が回ってくる時間が遅くなる。遅くなれば当然ながら、文乃自身の下着が汚れてしまう危険性が増す。

(あと四人……全員入れ替わってくれば……で、でもあの人が出てきてくれないから、もう少し我慢しなきゃいけないかも……)

ゴロゴロログギルウウウグルグルグルッ!

文乃の腹具合も悪化の一途を辿り、そして肛門の耐久も徐々に限界を迎えつつあった。前に並ぶ四人という人数と五つの赤い錠前は、何度見たとしてもその光景が変化しない。一番手前の個室から未だに響き続けているビチビチという音が支配している空間の中で、文乃は祈るように前方を見つめ続ける。

下腹が強烈に痛むとともに、直腸には再びどくどくと液状の大便が流れ込んでくる。今朝自宅を出るときには全く感じなかった便意は今になって牙を向き、液体をなみなみと携えた直腸は、重力の力と合わさって肛門をこじ開ける圧力をかけ続けている。

個室から流れる流水音だけが、文乃にとつての希望だった。個室の鍵が開く金属音がして、先頭に立っていた同じ制服の生徒が一番奥の個室に入っていく。彼女は小便だろうか。大便だろうか。下痢であろうか——願わくばすぐにできてほしかった。

その後も三〇秒に一つほど個室が開くほどのペースで、ゆっくりと列が進んでいく。文乃が……この場の全員が予想していた通り、一番手前の個室は、激しい脱糞音こそ聞こえなくなったが、未だに入れ替わる気配を全く見せていなかった。

(我慢、苦しい……こんなピンチになったの、初めてかも……)

ゴポゴポゴポポポポッギルギルギルギルギルッ!!

文乃のお腹が何度目になるか分からない悲鳴を上げる。痛みの中心が下腹から鼠径部へと移動してきて、文乃の額には汗が浮かぶ。便意

の波がいよいよ出口に迫りつつあることを悟り、文乃の心も徐々に焦燥に支配されつつあった。

「はあ………っ! うう……」

耐え難い便意が文乃を襲い、思わず声が漏れる。腹を擦り、身体を曲げてトイレの列に並ぶ文乃の姿は、誰が見ても大便を、それも下痢の大便を我慢しているのが明らかだった。間違ひなく彼女は、社会において弱者に他ならなかった——それでも、文乃の前に並ぶ別の制服を着た高校生は、決して文乃に順番を譲ろうとはしない。彼女は彼女で、やはり腹に痛みを抱え、文乃ほどではないが緩んだ大便を我慢している真っ最中であつた。

このトイレは、誰もとつて戦場である。それでもようやく、文乃にも勝利が近づきつつあった。中方にある個室が二つ続けて空き、文乃の前に並んでいた二名が相次いで個室へと入っていく。ようやく文乃は、行列の先頭にまでたどり着いた。

あと一人。あと一人誰かが出てきてくれさえすれば、文乃は便器を使用することができる。大便をしても許される場所で、腹の中で暴れ狂う下痢便を余すことなくぶち撒けることができる。

(早く、早く……っ、うんち、漏れる……っ!)

ゴギルルルルグウウウピィーギルッ!

排泄を意識した文乃の大腸は、その場所にたどり着くよりも前に大蠕動を開始してしまった。感じたことのないほどに強烈な圧力が文乃の肛門に到達し、限界いっぱいまで引き締められた括約筋が熱くなる。お尻に手を回して物理的に押さえ込みたい衝動を、辛うじて衆人の目と理性が抑え込んでいた。

だが、文乃がトイレに並び始めてからはもうすぐ一五分が経過しようとしている——時刻は七時五〇分。減多にないほどの長時間の我慢を前に、限界はもうすぐそこだった。

ぶ、びっ！ ブシュウ……ブビ、ブ、ビ、ビヂ、ッ……！

「ひいっ……！ まだ、だめ……っ！」

震えるお尻の穴から、とうとうガスが漏れ始めた。すぐ後ろに並ぶ会社員の女性に向けた怪訝な視線すら気にならないほど、今の文乃は我慢することに集中していた。我慢をすること／大便をすることしか考えられない。

だが、運命は無情にも、文乃にさらなる我慢を求めている。どの個室にも動きはない。どこかの個室から紙を巻き取る音はしているものの、その音はいつまでも繰り返され、終わりが見えない。一番聞きたいトイレを流す水の音だけが、トイレの中に響かない。

「お願い……誰でも、いいから……」

ゴギルルルルゴロゴロゴロオッ！ ぶびっ……！！

涙を浮かべながら前方を見つめる視線は、もはや折りそのもの。

五つある個室のうち、どこでも良かった——同じ学校の生徒が入った一番奥の個室でも、ひどい下痢をしていた手前の個室でも、入れ替わったばかりの二つの個室でも、少し動きのないもう一つの個室でも——どこでも良かった。大便ができさえすれば、どこでも良い。

身体をよじり、ショーツが尻の合間に食い込むほどの総力での我慢は、およそ一分ほど続いた。ようやく紙を巻いていた音が止まり、それから程なくして水が流れる。

空室の表示へと変わったのは、一番奥の個室だった。

「あ……あ、空いた……っ」

やや浮かない様子の、同じ制服を来た生徒にはほとんど目をくれることもなく、文乃はトイレの奥に向かって最大限の速度で——腹を刺激しないよう、早歩きで——移動する。驚きの表情を見せつつも道を開けてくれた先客に感謝しながら、文乃は急ぎ個室の中へと入り、震える右手で鍵をかけた。

その瞬間——文乃の顔が、一瞬だけ青ざめる。

（この、におい……もしかして私、漏らして……!?）

扉を閉じて個室内の空気が滞留しだした瞬間に、鼻をつくのは強烈な下痢便の悪臭だった。反射的に、文乃は自身の肛門に感覚を集中させる。けれどもすぐに、その臭気は文乃が生み出してしまったものではなく、もともと空間に漂っていたもの——要するに先客が個室に残っていた便臭であることを悟った。それも、健全な大腸の中で発酵を終えた大便が放つ臭気ではなく、文乃のように調子の崩れた大腸から生み出された下痢便の放つ、酸味を帯びた臭いである。

もしかしたら入れ替わった先客の生徒も、お腹を下していたのではないか。そんな疑念が頭をよぎるが。

グギルルルギュロロロロオッ……ッ！！

だがそれ以上に今は、目の前にある便器に飛びつくことが最優先であり、それ以外のことを考える余力はなかった。扉の方を向いて洋式便器に尻を向ければあと少しである。素早くスカートを跳ね上げながら、どこか子供らしさを感じさせる水玉模様の入った水色のショーツを下ろし、便座に倒れ込む。

プラスチックの便座に残る先客の体温を感じながら。



「んううう、ふうううんっ……」

文乃の尻は、便器の上で爆発の瞬間を迎えた。

ビチビチビチドビビビビビビビッブリブリブリブウッ！

ビシャッ、ブジュッ、チュオツ！ ブウウウウウウッ！！

水気を帯びたドロドロの下痢便とペースト状の軟便が入り混じり、そこに合わさったガスが醜惡な音を奏でる。有名な中高一貫校に通う女子中学生が奏でているとは信じ難い脱糞の音が、個室を通り越して女子トイレ全体に響き渡る。きつと、順番待ちの行列に並ぶ全員が、文乃の排泄音を耳にしていることだろう——つい数分前に、スーツ姿の女性が音を奏でていたときのことを文乃は思い出した。

(音、ダメ……っ！ お腹痛い、うんちとまんない、うんち……っ)

ビチビチビチビチブウウウウウブッブリブリリリ！！

自分の尻から激しい音が響いているのは、他ならぬ文乃自身が一番理解している。それでも、理性の力だけではこの羞恥に満ちた状況はどうすることもできなかった。一六分間に及ぶ我慢で既に使い物にならなくなった肛門括約筋は僅かですらも収縮させることができず、痛む腹に添えられた両手は、レバーを倒すべく背中に戻すこともやはりできなかった。

下痢気味、という普段の文乃を形容する言葉では言い表せないほど、文乃の腹は異常なペースで蠕動運動を繰り返している。文乃は経験則から、こうなってしまうとにかく腹の中身を出し切る以外に、対処法が無いということを身に染みて理解していた。

幸いにして文乃はもう我慢という苦行から解放されている。加えて文乃のお尻の下にあるのは使い慣れた洋式の便器。排泄を開始する前

よりも遥かに濃くなった臭気を感じつつ、文乃は今一度息を吸い直し、下腹に力を込めた。

ブチュルルルルルドドドドドドブウウウウウッ！

閉じかかった肛門が再び隆起し、その中央からは変わらず醜惡な音が響き続ける。既に文乃は直腸の中身を一度空にしており、今の文乃が苦しめられているのは、第二波ともいえるべき便意だった。大腸の奥側から送り出されてきた水気の多い下痢便が、ガスと混ざり合って肛門の粘膜で破裂し続けている。

(それにしてもひどい下痢……。昨日の食堂のカレーかな。お腹壊しそうだったからお代わり一回だけにしたんだけど)

ゴロロゴギョルッ！ グルグルグルルルウウッ！！

(やっぱりお代わりしないのが正解だったかなあ)

普段以上に腹を下したときは、排泄をしながら原因に思いを馳せてしまうものである。普段の日は明確な原因が無いことも多いが、今日に限っては昨日のことを思い出せば有力な可能性があった。

ブビビビッブヂイッ！ ブウウウッ！ ビチッ……ブビッ

第二波との格闘が始まってから二分が経過する頃には、文乃の尻から響く音も小さなものへと変化していた。行列に並んでいた頃の腹痛は嘘のように霧散し、今は鼠径部に僅かな痛みと残便感があるのみだった。加えて、文乃が個室にこもり始めてからは既に五分が経っている。未だに途切れることのない行列に並ぶ誰かがこの便器を欲していることを思えば、そろそろ後始末にしても良い頃合いだった。

それでも文乃はまだ、息むことをやめようとしない。下痢便がぱたぱたと垂れるのみになったお尻の穴は、数秒感覚で開いては閉じてを

繰り返すが、その奥から出てくるのは僅かな量のガスのみ。

(そろそろ出し切った気もする、けど……)

プビッ！ プジュッ！ プウー……ッ……。

(学校でお腹痛くなると困るし、出しきらなきゃ……)

文乃は普段から下痢気味の体質である。それ故どうしても学校での排便は避けて通れない問題であり、どうしても便意が我慢できなければ学校のトイレで用を足すことも、授業中に挙手することもできる。

ただそれでも、文乃が思春期の少女であることに変わりはない。友人たちのいるトイレに排泄音を響かせてしまえば相応に恥ずかしさを覚え、授業中に手を挙げてトイレへと離席するのは数分間の葛藤を経るからことである。

そんな文乃だからこそ、お腹の奥に存在している小さな残便感を無視することだけは、絶対にできなかった。

「ふうっ。んんん……っ！ あ、来た……う……んっ！」

およそ一分の後。文乃が思っていた通り、残便——と形容するには明らかに量の多い下痢便の滴が三秒間、文乃の尻から便器に向かって降り注ぐこととなった。この量の便が大腸に残ったまあいれば、恐らくは昼休みに再び便意を催すことになっていただろう。

今度こそスッキリとした表情を浮かべ、文乃はトイレトペーパーに手を伸ばす。当然ながら一度や二度でお尻が綺麗になるはずもなく、丁寧に五回拭い上げた後に文乃は立ち上がった。

普段通りでありながら、普段よりも形の残っていない軟便と下痢便を見て、改めてお腹に手を当てる。腹具合に不安を残しつつも、文乃

は学校へと向かうために水洗レバーを倒し、個室から出る。

果たして、トイレ待ちの先頭に立っていたのは。

(……またウチの学校？ 三人連続でなんか専用みたいじゃん)

またしても、同じようなグレーの制服に身を包んだ少女が、やや苦しげにお腹を気にしながら個室へと入っていく。同じ学校の、お腹を下している女子生徒が、三人連続で同じ個室を使う——個室の位置はともかくとしても、果たしてこれは偶然だろうか。

(でも別にノロウイルスとかの時期じゃないしな。なんだろう……)

とはいえ、お腹の中身を出し尽くしてスッキリした文乃は、すぐにそのことを意識の外へと追い出してしまおう。おなかに関する心配もひとまずなくなった文乃は、予定よりも二五分ほど遅れて学校へと向かうのであった。

5 午前八時十三分

駅トイレで長時間の我慢を強いられた末に排便ができる女子生徒がいれば、学校のトイレでやはり同じように我慢を強いられ、排便をする女子たちもいる——午前八時一〇分になると、運動部の朝練の終了を告げるチャイムが校舎と体育館に響く。その音を合図に、テニス部とバレーボール部、それにバスケットボール部の部員たちが一斉に更衣室へと引き上げ、ウェアから制服へと着替えていく。

人の流れが落ち着いてからおよそ二分——制服に着替え終わった女子生徒たちは、続々と更衣室から出てくる。およそ半数は落ち着いた様子で友人と談笑しながら教室へと戻っていくが、もう半数は様子

が違った——やや慌てた様子で校舎へと向かっていく者と、練習を終えたはずなのに体育館へと逆戻りしていく者。

後者の彼女たちは皆、トイレを指していた——朝練のために早起きをし、朝食をしつかりと食べてから練習に臨む。食後から練習開始までの間に便意を催せば運が良いが、運悪く練習中に催してしまえばこうして練習が終わり着替えを終えるまで我慢をしなければならぬ。そういう事情を抱えた運動部の女子生徒たちは、体育館か校舎、どちらかのトイレに向かうべく一心不乱に着替えを済ませていた。

便意を催している女子たちのうち、半分近くは校舎へと歩いていく。渡り廊下を歩かなければならぬことを除けば、古い体育館と違って全て便器は洋式であり清潔と最善の選択肢である。

にも関わらず、残りの半分は体育館へと向かい、その中にある古い女子トイレに吸い込まれていく。個室は五つあるが、一番奥の個室を覗いて全て和式であり、タイル張りのトイレは利用者が少ない。それでも体育館のトイレを使う理由はただ一つ、遠い校舎の女子トイレまで我慢をしたくない／我慢できない女子たちが、駆け込んでいく。実際今日も、体育館のトイレはもの一分足らずで次々と女子たちが入っていく、あつという間に満室となった。それでも人の流れは止まらず、順番待ちの列ができていく——そこには部活も学年も関係ない。ただ先に入った順に列ができ、先に着いた者が、先に便器を使う権利を有する。誰しものが、大便を我慢していた。

きゅるるっ ごろごろごろ……ぐうっ。

「うわ、並んで……今日は出遅れちゃったか……」  
次々と出来上がっていく列の八番目に並んだ少女は、バレーボール

の副キャプテンを務める杉浦遥だった。部員から厚く信頼を集める彼女であつても自然の摂理である便意には逆らえず、そしてトイレの順番待ちという社会の基本原則からも逃れられない。どれだけ大便がしたくとも、彼女に順番が回ってくるのはまだしばらく先のことだ。

どの個室もまだ排泄を始めてから一分足らずで、入れ替わりそのような音はどこからも聞こえない。加えてタンク式で音消しをすることができないこのトイレでは、先客たちの排泄音が丸聞こえだった。五つ並んだ尻から、ニチニチという気持ち良さそうな排便音や、ビチビチというやや苦しい脱糞音が響く。手近なこの体育館のトイレに駆け込んできた彼女たちは、練習中から長い我慢を強いられたか、腹の具合が良くないかのどちらかだった。

列に並ぶ生徒たちも、例外なく大便を我慢しているようでお腹を気にしながらじつと耐えている。二分から三分ほど待っていると、ようやく排泄音のいくつかが止まって個室が入れ替わり始めた。並んでいた女子たちが駆け込んでいき、個室の中で安堵のため息を零す。下し気味の音を立てていた先客もそこまで酷い下痢ではなかったようで、五分も経たないうちに全ての個室が入れ替わり、列は五人進んだ。

けれども——そこらが問題であった。

一番最後に開いたのは、最も手前にある和式トイレの個室の扉。駆け込んでいった女子生徒が慌てた様子で鍵を掛けるとすぐに。

ブビブビブビジュルルルルブウーッ!!

他の個室から響く音とは全く性質の異なる爆発音に、行列の大半の意識が向けられる。彼女は下し気味、という表現では到底言い表せない、ひどい下痢に苦しんでいたようだった。

もつとも、これだけの人数が便意を催して列を作っていれば、誰か一人くらいはひどい下痢に苦しんでいることもある。毎朝必ず見られる光景というわけではないが、数日に一度は遙も耳にすることになる破裂音である。なにより五年半もこの生活を送ってきた遙自身も、このトイレで激しい腹下しに苦しんだことが一度だけあった。

だからこそ、一人がそうして腹下しの音を奏でたところで、他の生徒が動じることはない。残りの四つの個室では変わらず気持ち良さそうな排泄音が響いて、用を足し終えた部員たちが個室を交代する。そして、いよいよ遙が行列の先頭に立ったとき——今度こそ、遙たち複数の部員が目を見開き、トイレの奥の方を見る瞬間が訪れた。

——ピチピチピチピチッ！　　ブビッ、ブウウッ！

——ブビィィィィ……ブリッピチュルルルルッ！

「……え？」

一番手前の個室、ではない。その隣の個室と、一つ空けて奥から二番目の個室からも、激しい脱糞音が響き出す。いずれもたった今交代したばかりで、遙の前と、その更に前に並んでいた女子が入っていたはず。遙の所属するバレー部ではないために名前は分からなかったが、確かに思い返せば、随分と苦しうに思えた——

ゴロロロロッ！　　ギルギルギルギルビィッ！

「……うう、っ」

腹を下した少女たちの排泄音を耳にしたからか、或いはそこから漂う大便の臭いが遙の大腸を刺激したのか、遙の下腹も次第に鈍い痛みを発し始める。単なる健康的な便意に加えて、どこか小さな違和感が、遙の腹の中に蠢いている。

（お腹、ゴロゴロしてきたかも……。なんか、変な感じ……）

長い生活の中で遙の感覚もやや麻痺しつつあるが、遙が便意を催し始めたのは練習が終わる少し前のこと。着替えてトイレに並び先頭にたどり着くまでに、既に一〇分近い時間の我慢が続いている。

長時間の我慢が、次第に遙に牙を剥きはじめていた。健康的な大便が遙の肛門を突いているとばかり思っているが、その奥には明らかに固形ではないもの——ドロドロに溶けた軟便が待機している。腹に手を当てれば、異常な蠕動運動を容易に感じ取ることができた。

グギルルルルッ！　　ゴロゴロロロロッ！

（ううっ、急にヤバくなってきたかも……。あと一人なの……）

行列の先頭に立っているのだから我慢も容易——とは言えない。普段のトイレであれば、五つの個室は一分も待てばどこかが必ず空き、遙も便器にありつくことができただろう。

だが今日は違う——少なくとも三つの個室から、水気の多い下痢の排泄音が響いている。入れ替わったばかりの二つの個室はもちろん、一番手前の個室からも未だに排泄音が途切れない。遙の希望は、残る二つの個室に託されていた。

（うんこ、したい……それに、おならも出そう……）

固形の大便によって出口を塞がれた狭い腸管の中を、熱い軟便とガスが動き回っている。ゴボゴボという空氣の動く音が、遙に危機感を与えていた。少しでも気が緩めば、大便は漏れずともガスを漏らしてしまうかもしれない。

額に汗を浮かべ始めた遙が見つめる中、ついに水の流れる音が響き渡り、一番奥にある個室の扉が開いた。



隣の個室は確か、かなり下痢に苦しんでいた女子が入っていたはず。その女子がようやく個室を出たと思いきや、次の女子も再び同じようにひどく下している。偶然か、なにか必然たる原因があるのか——腹をさすり頭を回転させても、結論は出ない。

ただ、隣から響く音は、遙の大腸を程よく刺激したようだった。

(あ、うんこ降りてきたかも……これでスッキリするかなあ)

ブジュッ、ビヂビヂッ！ プリィ~~~~ブウブウウッ！

「んんんっ……！ はあ、ふうっ」

残便を出したことでスッキリした表情を浮かべた遙は、すぐにトイレレットペーパーを取り始める。手早く、けれども丁寧に尻の穴を拭いた遙は、立ち上がってショーツを穿き直す。ドロドロに溶け切った軟便と、その中央を貫く一本の固形便を見ながらレバーを倒し、便器の中に再び透明が取り戻されたのを確認した遙は個室を出た。

すでに行列はわずか三名になっていた——けれども順番を待たれていたのは事実。先頭に並んでいた女子が、待ち焦がれた個室に入っていくすぐにまた鍵を掛ける。彼女は幸いにも下痢を我慢していたわけではなかったが、個室からはすぐに気持ち良さげな排便音が響いた。(お腹痛そうな子、多かったよね。気のせいだと良いんだけど)

どこか、そこはかたない不安を感じながら、遙は体育館のトイレを出ると教室へと向かった。

7 午前一時〇五分

有名な私立の中高一貫校でありながら、この学校の設備はところどころに年季を感じさせる部分が残る。その最たるものが、本校舎から伸びたおよそ二〇メートルの渡り廊下を抜けた先にある旧校舎であった。グレーのコンクリート壁は数カ所が崩れており、無数に見られる小さなヒビが、旧校舎の築年数を物語っている。

それでも、この学校の教育において旧校舎はなくてはならない存在だった。設備の都合で本校舎に配置できていない教室——音楽室や理科室といった特別教室は、旧校舎に置き去りにされたままになっている。特別教室を本校舎に移設する計画は毎年立ち上がりながらも頓挫し、結局生徒たちは古びた校舎での授業を甘んじて受け入れていた。

その日、三時間目の授業が行っていたのは化学実験室のみ。一年生のクラス、三六名の生徒が実験室に集まり四人一組となって実験を行っている。ミョウバンや食塩の水溶液を作成し、温度を低下させ決勝が生成される様子を確認するという実験は単純であり、しかもまだ飽和水溶液を作成し終えた直後という時間帯は、ピーカーの中に変化もなく生徒たちにとっては暇な時間となっていた。

生徒たちの大半は同じ班の女子たちと談笑しながら時間を過ごしている。実験室全体が喧騒に包まれ、まるで休み時間のように弛緩した雰囲気広がっている中で、一人の少女がしきりに時計と自らの下腹部を交互に見つめている。

ぐぎゅううううっ……ごろごろごろっ……。

(どうしよう、ウンチしたくなってきた……しかも授業中……)

篠原早織は、この日二度目となる便意に苦しめられていた。登校前に自宅で排便をしてからおおよそ三時間、その時に覚えた不快感は現実

のものとなり、腹痛に加えて強烈な便意となって早織に跳ね返っている。波の便意ではなく、腹を下した下痢の便意に、早織は数分前から悶え苦しんでいた。

（よりによって実験の授業中だし……あと三五分なんて絶対我慢できないよね。今のうちならトイレ行けそうだから、早めに行っておいたほうが良いかな……で、でもトイレって他の子に言わないと……）

目の前にはクラスメイトが三人、同じ実験班として座っている。あまりクラスの中では話をしないグループの女子だが、その中途半端な距離感が余計に早織を躊躇わせる。気軽に「お腹が痛い」と言い合えるほど親しくもなく、無抵抗に言えるほど遠い関係でもない。便意を感じながらも早織はずっと立ち上がれないでいる。

けれども腹痛はそんな早織のことを待つてはくれない。グルグルと音を立てる腹は痛みを帯び、いつ大きな波を——すぐ真横に座るクラスメイトの耳に届くほどの轟音とともに、大量の下痢便を一度に直腸に向かって送り込んでくるか分からない。そうならば最悪は、実験室の中で破滅的な事態に陥る可能性すら待ち受けている。

辛うじて残された理性を振り絞り、早織は立ち上がった。

「ごめん……お手洗いで行ってきてもいい？ 今朝からちよつとだけお腹の調子悪くて……すぐ戻るから」

精一杯の言い訳を並べ立て、早織は自らの窮状を素直に申し出た。既に立ち上がり、そして右手を腹に当てている早織を前にしたクラスメイトは。

「うん。ていうか大丈夫？ 顔色悪いよ？」

「大した実験じゃないからさ、ゆっくり行ってきたよ」

「そうそう。保健室は行かなくて大丈夫そう？」

早織に心無い言葉を掛ける人間など、誰一人としていない。ここは早織が昨年まで通っていた小学校とは違う——中学受験という選抜を勝ち抜いた女子だけがこの学校に入学することを許される。性格の悪い者がいないわけではないものの、生徒の大半は大人しい性格。

「ごめんね……す、すぐ戻るからっ」

治安の良さに早織は安心しつつも、それでも予防線を張ることは止められない。それは自身の羞恥心を少しでも和らげるためのものであり、一人の女子としてのせめてもの抵抗であった。

「先生……お腹が痛いのでトイレに行ってきた良いですか」

「ええ、良いですよ。一人で大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫です」

ちようど早織のテーブルのすぐそばに来ていた初老の化学教師は頷くと、再び各班を巡回する。早織はやや駆け足で化学実験室を出て、人の誰もいない廊下に出た。薄暗く奥まで続いている廊下の先にある女子トイレは、早織の今の位置からは扉すら見えない。

早織がトイレに向かって歩き出そうとした——瞬間。

ギュルルルゴロゴロゴロビー——ッ！！

「う……っ！ お腹痛い、早く、うんち……っ！」

早織がトイレに離席したのを見計らったかのように激しく暴れ始めた大腸は、早織が感じていた通り、腹の奥に溜まっていたドロドロの下痢便を一気に出口に向かって押し出し始めた。廊下全体に響くほどに錯覚するような大きな音が腹の底から鳴り響き、早織は顔を赤くする——だが、立ち止まっている時間的猶予はない。

制服の上から下腹をさすりながら、早織はトイレへと向かう道を急いだ。化学実験室を出て生物実験室の前を通り、その先にあるのは音楽室。実験室に比べれば重く分厚い扉を二つ超えた先にあるのが、旧校舎にある唯一のトイレだった。

（着いた……午前中は暗いから使いたくないけど、仕方ないよね）

女子トイレの入口の反対側には大きな窓があるものの、西側を向いているために午前中のこの時間にはまだ光が差し込んでこない。女子トイレと書かれた入口を通り抜けた先はより一層暗く、天井の蛍光灯が放つ人工的な光だけが空間を照らしていた。

とはいえ今の早織にとって必要なのは空間の明るさではなく、暴れ狂う腹の中身を全て受け止めてくれる純白の陶器である。入って右手に並んでいる二つの扉はいずれも開け放たれており、滅多に来ることのない利用者を待ち続けていた。

「良かった、洋式空いてる……ってそりゃそうだよね」

二つしかない個室のうち、奥側は洋式であるものの手前側は和式である。休み時間や昼休みであれば洋式が使用中である可能性も考えられるが、今は授業中。先客に縛られることも、音を聞かれる心配をする必要もない。早織はいそいそと奥側の個室の中に入り、外開きの扉を閉じて鍵をかける。

グギグググウウウギルギルッ！　ぶ　ぶびっ！

「うう……っ！　待ってまって、あとちょっと……」

便器を見て排泄を意識した大腸がいよいよ大暴れする。早織は急いでスカートの中に手を入れ、一気にショーツを下ろした。

（うんち、うんち……うんちできる……っ！）

便座に腰を下ろした瞬間、ため息をつく暇もなく尻の穴が熱くなる。たった数分間、されど数分間——懸命の思いで閉じられ続けてきた菊の門は花開くと同時に、やや黄土色じみた茶色に染められた。

ブリブリブリリリリリリニチニチブビュルッ！

「んんっ……！　うゝんんっ……！」

直腸にたつぷりと溜め込まれた軟便が弾け飛び、無人の静寂を切り裂いて女子トイレの中に激しい音を反響させる。想像していた通り早織は腹の調子を崩しており、けれどもその崩し方は彼女の想像を遙かに上回っていた。ペースト程度の緩さだった軟便はものの数秒のうちに水分率を増していき、たちまち泥状の下痢便へと変化する。

ブウッ！　ビヂヂイッ！　ブリリリリリビヂビヂッ！

（音、すごい……。誰もいなくて良かった……）

他に利用者がおらず静かな環境が、早織の排泄音の大きさを際立たせる。もし万が一、この排泄音を誰かに聞かれていたら——無論、それを避難する直接的な言葉は掛けてくるような人間がいないと分かっていたとしても、恥ずかしいことには変わりなかった。

誰もいないことに安堵しつつ、早織は腹痛と闘う。一刻も早く授業に復帰するべく腹を擦るが、早織の祈りとは真逆に大腸は蠕動運動を止める気配を見せず、そればかりか腹をさすったことを刺激に、より一層激しいペースで下痢便を出口へと押し付ける。

当然、直腸に溜まりゆく下痢便を体内に抑え込むことができるような腹具合でもなければ、肛門もまた開ききっている。腹の音から数秒後には再び尻から爆発的な音が響き渡った。

（お腹、痛い……。結構時間経ったはずなのに、まだうんちがした



い……うっ、出るっ！)

ビチビチビチビチビチチチチチチボボボボッ！

加速していく手の運動は、早織が感じている焦りを物語っていた。授業を離脱してからはもうすぐ五分が経過しようとしている。いくらお腹が痛いと言っても、クラスメイトに「すぐ戻る」と言ってしまった手前、急がないわけにはいかなかった——だがいくら踏ん張っても残便感があるどころか、便意が弱まる気配すら感じられない。

トイレから出られる見込みが立たないまま、早織はひたすらに便器の中に茶色を注ぎ込み続け、時間だけが過ぎ去っていく。苦しい表情を浮かべていた早織が、にわかに顔を上げた、そのとき。

(足音……嘘っ、誰か来る……？ もしかして先生、とか……)

だが、それはすぐに違うと分かった。上履きとリノリウム床がこすれる独特の音は、その足音の主が教師ではなく生徒であることを示している。何よりその足音はずいぶんと焦った様子で、廊下を駆け抜けるとトイレへと駆け込んだ。

身構える暇もなく、足音は一直線に奥の個室へと——早織が入っている個室へと向かってくる。外開きの扉が備え付けられている洋式トイレの個室は、遠くから見ただけでは使用中かどうか判断がしづらい。その足音の主も、つまり洋式トイレは扉が閉まっているだけだと思ひ込み、ドアノブに手を掛けた。

だが当然、その扉には鍵がかかっている。足音の主が扉を引いても、扉はガタガタと震えるだけで外側に向かって開かれることはない。

「えっ……もう……っ！」

ようやく早織が入っているという事実気がついたのか、足音は個

室の前から離れ、代わりにその隣の個室へと入ってくる。慌てた様子が鍵が掛けられ、衣擦れの音と足音が同時にしゃがみ込んだ。

ブッブリリリリリビチビチビチビチビチブウー……っ!!

「んっ……はあ……っ！ うう……っ」

その音はまるで早織の尻から響いている音のようであり、けれども隣の個室は和式便器である分だけ、むしろ大きな音となって女子トイレの中に響き渡る——当然、その音は早織の耳にも届いた。

(私以外にも、お腹痛い子がいたんだ……そっか、私が洋式使ってた、仕方ないから和式に……ちよっと申し訳なかったかな)

誰しもトイレを使う際には、ましてや腹が痛いとおつては、落ち着いて腰を下ろすことができる洋式便器を使いたいというもの。けれどもこの女子トイレにおいて洋式のトイレはたった一つだけ——そして先客たる早織がすでに使用中。故に隣の個室の彼女は、早織と同じ腹具合でありながら、座るのではなくしゃがむことを強いられている。隣から響いてくる音が、再び早織の腹を刺激した。腹の痛みが強まり、早織も腹を抱えながら上体を前に倒す。

「うっ……はあ。んぐうう……っ！」

ビチチチチッ！ ブビュルルルブリッ！ ぶう……っ

隣からの音に負けない排泄音を早織が響かせる。すでに腸の中身を出し尽くしつつある早織の尻から飛び出すものは、液体よりもガスの方が多いほどだった。それ故に早織の肛門の粘膜は大きく震えながら、水っぽい破裂音を奏でる。尻から始まった音は洋式便器の中で反響し、女子トイレの中に大きく響き渡った。

早織の排泄音が止まれば、今度は和式トイレの方から排泄音が響い

てくる番である。第二波に襲われている、名前も知らない女子生徒は便器にしがみつきながら、尻に押し寄せてくる下痢便を全力で便器に向かつて嘔き出し続けている。

「ううんっ……。んく、いたた……」

ビチヂチヂッ！ ブジュブジュブジュブリリリリビチッ！

（隣も、かなりお腹壊してるよね……偶然かな。っていうか聞いたことあるような声な気がするし、もしかして同じクラスだったり……ま、そんなわけではないよね。別の特別教室かな）

早織もまさか、隣で和式便器にしゃがんでいる女子生徒が、同じクラスの話したことがある生徒だとは思ってもよらない——そして隣もまた、早織が一足先にトイレへと離席したことには気づいていなかった。互いに互いのことを認識しないまま、まるでターン制のように交互に排泄音を響かせ、二人は腹の中身を各々の便器へと絞り出す。

——ブジュルルルブリブリブリブリビチビチビチッ！

ブブッ……ブリッ、ビチッ。ぶううう……。

およそ三分の後、先に入った早織の方が先に腹具合を落ち着かせるのは自明の理であった。隣の和式便器から響く、止まる気配のない水気たつぷりの脱糞音を聞きながら、早織は腹の中に残った僅かなガスを絞り出していく。未だに腹痛は完全に解消した訳ではない——けれどもトイレに立ってからすでに一〇分が経過しようとしているという事実と、隣で別の誰かが同じく腹を下し排便しているという事実が、早織を焦らせていた。

（お腹、かなり落ち着いたし……出よう。隣もまだウンチ中だし、あんまり私が長居しない方がいいよね）

トイレットペーパーを右手に巻き取り、尻に当てる。ぬるりとした感覚とともに紙が動き、一瞬のうちに尻に触れた紙の表面は茶色が塗りたくられ、使い物にならなくなった。折り畳んで別の面を使う気力も湧かず、早織は紙を捨ててすぐに次の紙を巻き取っていく。

四回ほど紙を交換し、ようやく汚れが付着しなくなったのを確認した早織は一安心のため息をつく。立ち上がってショーツをはき直し、洋式便器の中の惨状に目を背けるかのようにレバニ手を倒そうとした、その瞬間のこと。

——ごぎゅるるるるうっ。

腹の奥から、大腸を伝って大量の下痢便が一気に出口に向かって押し寄せてくる轟音。腹が悲鳴を上げ、猛烈に腹を下していることが一瞬で分かるくらいに大きな腹の音。

その音は、隣の個室を使っている女子生徒、ではなく。

グリユグリユグリユゴゴゴゴビィィィィッ！！

「ひうっ……!？」

（お腹、急に……はあっ、ウンチしたいウンチ出ちゃうんちっ!!）

## 第二部 絶望

## 1 午後一時二五分

つい五分前に昼休みが終わったばかりの五時間目の教室というのは、どこを見ても弛緩している様子が見られていた。それは最高学年である高校三年生のフロアを見ても同じで、教室にはすでに船を漕ぎ始めている者や窓の外をぼうっと眺めている者も見受けられる。

その中で、物理の授業が行われている一つの教室は、まだ比較的集中が保たれている雰囲気をかううじて維持していた。教室の後方に着席している杉浦遥もまた、きちんとノートを取り、黒板に書かれた図を丁寧にノートへと書き写している。

けれどもその手は、およそ一分間の間ビタリと止まったままになっている。問題が難しく考え込んでいるから——とは思いたい、それはごく基本的な問題だった。

遥を悩ませている本質的な問題は、別の場所にある。

ゴロロロロロロッギュルグウウウウ……

腹の奥から大きな鳴動が響くと同時に、遥はシャープペンシルから手を離すと、その手を机の下に潜り込ませた。腹に手を当ててさすりながら、具合を探る——ことは、今はできない。

……ギュルゴロゴロゴロロロオオオオオオオオビィッ!!

(ううっ!? なにこれ、さっきまでとは全然違う……だめ、こんなの絶対我慢できない、休み時間までなんて無理……は、早くトイレ行きたい、うんこがしたい、うんこ漏れるっ!!)

つい一時間と少し前、四時間目の授業中に遥を苦しめた便意と比べても、強烈さが常軌を逸していた。尋常ではない下痢と腹痛。我慢するなどと言う容易な選択が許されないという現実を、遥は本能によって感じ取った。

身体が便器を欲している。四方を壁に囲まれた空間で便器に座り、尻に押し寄せようとしている熱い濁流を下水道へと追いやりたい。数秒のうちに遥の脳内は排泄することで埋め尽くされ、それ以外のことが考えられなくなる。目の前にある物理の公式は、意味の無い文字の羅列にしか思えなかった。

「先生……お腹が痛いので、お手洗いに行ってきます……」

無意識のうちに遥は立ち上がり、気づけば教壇の元へと駆け寄って弱々しい声で教師に離席の許可を請うていた。——いや、もはや許可を求めてすらおらず、遥はトイレに行くと言言したに過ぎなかった。

遥の様子が普通でないのは、表情を見れば一瞬のうちに分かることだった。教師も遥を止めることはできず、一言「ああ……」と言いがら見送ることしかできない。腹を抱え、腹痛に苦しんでいることを隠そうともしないまま、遥は教室の外に出た。

グギュグリュグルルルルギュルゴロゴロロロログウッ!

「……ううっ!」

その次の瞬間、遥は全力で廊下を駆け出していた。六年間の部活動で鍛えた健脚がこんなところで生きてこようとは、誰が思ったか。今にも溢れそうな直腸の中身を懸命に押さえ込みながら、遥はギュルギュルと音を立てる腹をさすりながら走った。

勢いそのままにトイレへと入る。後は最寄りの個室へと——

——びじゅるるるるっ！ ドボドボドボドボウッ！

——ブリッ、ブビッ、ブウウウウウッ！！ ブビビビビッ！

——ブッブイイイビビビビビビビッ！ ぶりっぶびっ！

次の瞬間、遙の身体に急ブレーキが掛かり、遙は入り口に立ち尽くしそうになっていた。四時間目の授業中には一つの個室だけが使用中となっていたが、その三倍の数の個室に鍵が掛かっている。そしてそこから響く苛烈を極めた破裂音は、もはや扉をノックするまでもなく先客がおり、そしてそこで遙と同じような猛烈な下痢に苦しめられていることを宣言していた。

「んぐ……はあ、うううっ！」

「いたい、いたいっ……うう、んんっ！」

左右の列ともに、一番手前の個室は使用中となっている。最短距離にある個室に駆け込むことを余儀なくされた二人の女子生徒は、文字通り水のような下痢尾を便器にたたきつけながら、腹痛にあえぐその声を抑えようとしてもしていなかった。

「んぐうう……あああつ！ ふぐう、ううっ！」

右側の列、使用中となっている一番手前から一つ開けた三番目の個室からも同じような声と音が響いている。やはり激しく脱糞し続けている彼女は、他の二人に比べればいくらか水下痢ではなくただの下痢に近いような音を奏でていたが、彼女がやはり激しく腹を下してしまふのは、もはや時間の問題のように遙は感じた。

そして——四人目となった遙は。

ゴギルルルルグルグルゴオオオオオグルッ！！

「うう……っ、も、漏れる……ッ！」

最短距離の個室に入りたいが、そこはすでに使用中。かと言って二番目の個室というすぐ隣の便器を使うのも気が引ける——三番目にこのトイレに足を運んだ女子生徒と同じような思考回路を経て、遙は左側の列、奥から二番目の個室に入り、大きな音を立てて扉を閉めた。目の前には洋式便器。先走って緩みかける肛門を精一杯の力で閉じながら、震えだした右手で銀色の鍵をスライドさせる。スカートの中に両手を入れ、グレーのショーツを下ろしながら遙は後ろに向かって倒れ込んだ。

小さく息を吐く。隆起した肛門の中央、便器の中央に溜まった封水を捉えた瞬間に、遙の尻からも大爆発が起こった。

ブビビビビビビビビビビビブブブブブブウウウッ——

「んぐうう……っ!? はあ、ふうううう……っ！」

——ドボドボドボブビビイイイイビビビビビッ！！

便意の強烈さから感じていた通り、遙の尻から響いた音もやはり四時間目の最中の離席とは比べものにならない大きさだった。足下で巨大な爆弾が爆発したかのような音が遙の尻から発せられ、洋式便器の中で反響して女子トイレの中へと響いていく。すでに響いていた三つの音を凌駕する音が数秒間、遙の身体から生み出された。

遙自身が十八年間生きてきて一度も経験したことが無いほどに大量の下痢便とガスを一度に噴き出してもなお、遙の便意はおさまるところが増悪の一途を辿っている。腹が痛み、腸の奥底から下痢便が出口に向かって押し寄せてくる感触を前に、遙はただ無力に尻の穴を開くことしかできない。尻の穴を開き、腹を抱え座り続けることだけが、遙の精一杯の腹痛への対応方法だった。

(おなか、いたい……。他の三人も、こんなのかな……)

一分も経たないうちに排泄の勢いはピークアウトし、遙の排泄音は他の三つの個室からの音とそう大差ない音へと変化する。それでも絶えず遙の尻からは茶色が迸り、すでに同じ色に変化してしまった封水に新たな茶色を注ぎ込んでいく。異常に活発な蠕動運動が生み出した成れの果てである下痢便は、出しても出しても遙の腸の中から完全に消えそうな気配がまるでない。

もはや長期戦になるのは必至だった。遙より前にトイレに着いた三人も、トイレを出そうな気配のある音を全く立てていない。そればかりか時折、遙が排泄を始めた瞬間のような爆発音が、どこかしの個室から響くことすらあった。

五時間目の授業が始まってから、まだ僅かに六分ほど。それにも関わらず、すでに四人の女子生徒が駆け込んで、経験の無い猛烈な下痢と腹痛に苦しんでいる女子トイレ——そこに駆け込んでくる女子が、遙を最後に途切れると考える方がむしろ不自然かもしれない。

「はあっ、はあっ、はああ……」

「も、漏れる……。っ、待つて、まって……!」

ただでさえ四人の壮絶な脱糞音が響き渡っている女子トイレの中に、息を切らしながら女子生徒が駆け込んでくる——それも二人。彼女たちは当然ながら知り合いというわけでもなく、偶然同じ時刻に、別々の教室からトイレへと離席したにすぎなかった。

トイレに入ってきた女子生徒の足が、入り口でやはり一瞬だけ立ち止まる。すでに締まっている四つの個室と、学校のトイレとは思えない悪臭に満ちた空間は、排泄することだけを考えていた女子生徒たち

の思考回路をフリーズさせるには充分すぎるインパクトを持った光景だった。

それでも彼女たちは、自分の身体の奥から湧き上がる欲求に耐えることもできず、空いている個室へと駆け込んでいく。一つおきに閉じている個室を見た彼女たちは、迷うことなく空いている中でも最短の個室を選ぶ——片方は右の列へ、もう片方は左の列へ。そしてそれぞれ、手前から二番目の個室に鍵が掛かった。

(隣も入った……。私と同じ感じだし、お腹痛いのかなあ……)

すぐ右隣から響いている金属音と衣擦れの音、そして焦りに満ちた足音が、彼女の具合を嫌でも遙に伝えてくる。やがて足音が止まり、衣擦れの大きな音が響くと、爆発音が響いてきた。

ブバババババババッ! プリプリプリプリプリプリウウッ!!

(……やっぱりすごい下痢……。私もまだうんこ出そうだけど、これで合計六人……。みんな、授業中なのに腹痛くて、トイレでうんこしてるってことになるの……?)

繰り返すようであるが、ここは授業中のトイレである。休み時間であればまだ、半分以上の個室が埋まる光景も見慣れたもの——それでも、個室の全てで下痢をしている光景は異質であるが——と言うこともできるが、今はまだ授業が始まった直後。六人がほぼ同時に便意を催し、下痢をしている光景は、間違いなく異常であった。

——ビチビチビチビチーッ!! ドボドボドボッ!

——ぶびゅううぶちびちびちぶばっ! おぼおぼばばっ!

ひとたび音が重なればどの個室で誰がいつ音を立てているのかわからない。六人の女子生徒たちが、各々の腹の痛みに耐えながら脱糞

し続けている。その音には規則性などなく、けれども誰か一人の排泄が落ち着く頃には別の誰かがの腹痛が再燃しており、この空間には決して途切れることなく、誰かしらの排泄音が延々と響き続けていた。

「え……？ な、なんで………？」

そこへ七人目となる女子生徒が駆け込んでくる。女子トイレの中にひとたび足を踏み入れれば、右側の個室の列から三人分、左側の個室の列からも三人分の排泄音がステレオで響いているかのようであった。その場に立っているだけで頭がおかしくなるのではないかと思うくらい、女子トイレの中はすでに異常に満ちている。

閉ざされた手前側の個室と壮絶に幾重にも響く排泄音を前に絶望しかけた女子生徒も、一番奥の個室に空きがあることを見つけた瞬間に表情を一変させる。右側の個室にたった一つ残された空き個室に駆け込んだ女子生徒もやはり、激烈に腹を下していた。

ピリリリッブリブリブリッ！ ブッビィィィッ！

六重奏が繰り広げられていた空間に奏者が一人加わったところで、もはや大勢に変化はなかった。腹を下した七人の女子生徒が、洋式の便器に座り、ドボドボ、ビチビチと音を奏で続けている。そこには恥ずかしさも他者への感情もなく、ただただ排泄することしか考えられない七人の哀れな少女がいるのみである。

ブジュブジュブジュッ……ぶりりりっ。ブッブウ~~~~ッ！

「はあ、はあ……ふうふう……っ！」

遙も、バレーボールのフルセットの試合を終えた直後のような満身創痍の表情を浮かべながら、排泄を続けていた。出しても出しても茶色の波が途切れることはなく、便器の中を茶色に染め上げた今もなお

尻の穴からは下痢便が噴き出し続けている。シャツをまくり上げて下腹をさすれば、異常なペースで蠕動運動を繰り返す大腸が震え続けている振動が手のひらに伝わってきていた。

（お腹が痛い、うんこが出る……っ！）

ゴギュルルルルッ！ グリグリグリググウウウッ！

（下痢のうんこが全然止まらない……っというか、他の個室もみんな下痢してる……あと、埋まってないのって、もしかして私の隣の和式のところだけしかないんじゃない？）

便意の波を乗り切れば、僅かに周囲のことを気にする余裕が生まれてくる。だが顔を上げてても他の個室から響いてくる音は脱糞の音以外にはなく、自分の尻から響いていた音を再生されているような感覚に陥るほどであった。ただ一つだけ確かに言えることは、顔も名前も分からないが、遙以外に六人の女子生徒が同様に腹を下し、樹魚中にも関わらずトイレで排泄することを強いられていると言うことのみ。

残る個室は僅かに一つ、遙の入っている個室の隣にある、左側の一番奥の個室。だがそこだけは和式便器が残されており、普段からも女子生徒からは敬遠されがちな個室だった。ましてや腹を下しているときに大便をするとなれば、和式トイレを積極的に使いたいと考える女子はほぼ皆無だろう。

それでも、そこに駆け込むことになる女子は確かに存在する——慣れない和式トイレでの排泄を強いられる彼女は不幸なのか。或いは、たとえ和式だとしても便器と個室にありつくことができる彼女は恵まれている立場なのか。

その答えは、たった今トイレに駆け込んできた女子生徒だけが知る。

「え……満室？ いや、あ、空いてる……けど……」

八人目の女子生徒は、やはり腹を抱えながら小走りで女子トイレの中に足を踏み入れ、やはり先人たちと同じように驚きながら足を止めた。だが気を取り直し、最後の一つである空き個室に向かうものの、今度はその個室の前で足を止めてしまう——目の前にあるのは和式便器。腹を下しているときにできるならば使いたくはない。だがこの異常な空間において、便器の選り好みをする余裕などどこにも残されていないのは、すぐに理解できた。

最後の個室に利用者が入り、全ての個室の扉が閉ざされる。足音が便器をまたいでしゃがみ込んだ直後には、さらけ出された女子生徒の尻から激しい排泄音が響いていた。

びちびちびちびちびちやびちやぶうう~~~~っ！

尻の穴を空气中に晒している和式トイレは、排便の音が特に大きく響くことになる。ましてやそれがすぐ隣の個室となれば、遙の耳には一段と大きくその音が届いている。

（隣もすごい……和式だよね……そうだよね、これだけお腹痛かったら洋式が空くまで我慢、なんて無理そう）

遙のすぐ隣で、このトイレ唯一の和式便器にしゃがんでいる女子生徒の排泄音を聞きながら、遙もまた腹に手を当てた。ズキズキと痛む腹では現在進行形で下痢便が生み出され続けており、生成された大便は間を置かず直腸に流れ込んでいる。

ブリュリリュップボボオッ！ ドボドボッ、ブッビィーッ！

「……ううっ！ はあ、はあ……くうっ！」

止まらない下痢に苦しみつつ、遙は必死に周囲の状況を感じ取ろう

としていた。八つある個室から聞こえてくる音は混ざり合っているようでありながら、かろうじて一部の音の方向を聞き分けられる。

「う……ううっ！ はあ、ふう……っ！」

——ビチビチビチビチッ！ プリリリリップウ~~~~っ！！

一番遙の耳に大きく届く音は、和式トイレを使っている生徒の排泄音だった。当然ながら水のように激しく下した下痢便をひり出している真っ最中であり、その音が途切れる瞬間はない。このトイレに最後に駆け込んだ少女は、未だに第一波のさなかにあった。

——ブリップボップウウウッ！ ビチビチッ！

——ブジュウ~~~~~ブボボボボドボドボッ！

次に遙の耳に入るのは、右側にある二つの個室から聞こえてくる排泄の音。個室に入ってから多少なりとも時間が経過している生徒たちの尻から響く音は、左手から絶えず響き続けている音に比べればいくらか勢いが衰えている。ざりとて、その音が止まる瞬間は、まだまだ先であるように感じられた。

——ブリリリッピチビチビチビィ~~~~っ！

——ブウウッ！ ピチピチッ！ ブビビィッッ！

そして、トイレ内で右側の壁沿いにある四つの個室から響く音は、混じり合ってもはやどの個室から響いてくるのか区別がつかない。だが、四人の女子生徒が絶えず下痢に苦しめられているという事実だけは変わらず、四重奏となつて遙の耳に届く。

ブバババババッ！ ドボドボドボボボブビチッ！

「ぐう……っ！ はあ、はあ……っ！」

そして何より、自分の尻からも絶えず水下痢が便器に向かって噴射

され続けている。茶色の水が迸り、便器の中に溜まっている茶色の封水に新たな茶色を注ぎ込んでいくだけの時間が、いつまで経っても終わりそうにない。他の七人のことを心配できる状態には全くない遙もまた、激しい下痢に苦しめられていた。

だが——それでもまだ、悲劇は終わらない。

——タッタッタッタッタ……

（足音……まだ誰か来る？ いやちょっと待って、入ってきても空いてる個室がもうどこにも……）

廊下を駆けてくる足音が耳に入った瞬間、遙は自信の顔から血の気が引いていくのを感じた。それは九人目の足音であり、このトイレに存在する便器の数である八を超えている。それがどういう結末を意味しているのかは、幼稚園児であっても理解できるだろう。

「え……ちょっと、待ってよ、なんで……？」

トイレの中に入ってきた女子生徒の悲痛な困惑が声となって遙にも——そして他の女子生徒たちにも聞こえてくる。もはや何も聞かなくとも、彼女が自分たちと同じように腹を下し、下痢を我慢していることは疑いようがなかった。だが個室の中にいる八人の女子と、九人目となった彼女には決定的な差がある——彼女には便器が与えられていない。彼女はまだ、我慢をしなければならぬ。

程なくして彼女の苦しみは、各個室へのノックとなった。

——コンコンコンッ！

「あの、出てきてくれませんかっ!?」

——ドンドンッ！

「お願いします……お腹が痛いんです……!」

どこかの個室がノックされるが、先客には返事の余裕すらない。すぐに別の個室がノックされるも、結果は同じ。激しい下痢に苦しんでいる最中の女子生徒にできることの最大限は、自分の状況を排泄音として彼女に聞かせることくらいだった。

手前から順番に個室がノックされている。四つの個室がノックされ、けれどもどの個室からも返事という返事をもらえないまま、扉の外で苦しんでいる彼女は、五つ目の個室——遙が入っている個室のドアにすがりつく。

——ドンッ……ドンッ……!

「お腹、痛くて……お願いします、代わってください……!」

遙も苦しかった。ちょうど新たな大便の波が肛門付近に押し寄せたばかりであり、できることならそのまま尻を全開にして排泄欲求の全てを便器に叩きつけたかった——だが、扉の向こうで苦しむ同年代の女子を、無視することもやはりできなかった。

「ごめん、なさい……私も、お腹痛くて……ど、どうしても、うんこが止まらな、くてっ! ううう……っ!」

プップウウウウビデビデビデビデビデバッ!

遙は必死に言葉を紡ぐ。けれども頭の中で思い浮かべた言葉を最後まで言い切るよりも前に、便意が爆発した。尻の穴が強制的に開かれ、遙の言葉は排泄音によって遮られる。そして遙自身も口を開く余裕はどこにもなくなっていた。

「わかり……ました。ありがとうございます……!」

苦しうに扉の向こうの音が引き下がる。彼女が再び移動し、対面にある個室のドアを叩こうとした——その、瞬間だった。



「え、全部使用中？」

「今って授業中だよね……」

「どうしよう、も、漏れそう……っ！」

足音が連続してトイレの中に入ってくる。少なくとも三人の足音がやってきたが——今度はその足音が入り口のそばで止まることはない。やってきた女子生徒たちは、躊躇わず個室の前まで行き、そして各々が個室のドアを叩きだした。

「お願い代わって、お腹痛くて我慢できないのっ！」

「早く出てえ……っ!? 限界なの、早く終わらせて！」

「漏れそうだからトイレ来たのに……出てきてよおっ」

腹を壊し便意を我慢することの苦しみ医は、既に便器を使っている生徒たちが一番理解している。だが誰にドアを叩かれようと、個室の中にいる彼女たちの返事に変化することは、決してなかった。

「うう……………」

「……………」

「……っ！」

遙の入っている個室のドアも再び叩かれている。だが今回ばかりは、排泄の真っ最中だった遙も声を上げる余裕がなかった。誰一人として個室の外で順番を待つ同学年の女子生徒たちを気にする余裕が残っていない——誰もが下痢の便意を解消するのに精一杯だった。

ノックの音が鳴り止むことはない。そればかりか、時間の経過とともに便意が切迫してくる彼女たちの声が怒気を孕みはじめる。

——けれどもこれはまだ、パニックの始まりに過ぎない。

遙がその事実を実感するのは、もう少し後のことだった。

## 2 午後一時二十九分

昼休みが終わり、旧校舎でも五時間目の授業が始まっている——音楽室では、二年生のあるクラスが音楽の授業を受けている最中だった。一ヶ月後の発表に向けた、小グループ単位での合奏練習……のはずなのだが、すでに数名の欠席者と早退者が出てしまっているこのクラスでは、全員が揃って練習ができているグループはほとんど存在していない。雑談に包まれた音楽室の中の雰囲気は、弛緩きつたものになっていた。

その中で伊藤文乃は一人、浮かない顔をしながらキーボードの前に座っているばかりだった。四人でグループを組んだものの一人が欠席した上に別の一人が午前中に体調不良で早退してしまい、残りは二人練習などするはずもなく、喋ったり、ぼうつと音楽室を眺めたりするだけの時間が続いている。

「……文乃、もしかして体調悪い？」

「あ………えっと」

無意識のうちに顔色が悪くなっていただろうか。或いは、昼休みに強烈な下痢の便意に苦しめられた苦しさや、まだ表情から抜けていなかっただろうか。いづれにせよ、友人の目に映る文乃の表情は、普段の落ち着いた様子からはかけ離れたものだった。

文乃は一瞬の動揺の後に、小さくため息を吐く。体調が悪い、それもお腹が痛いなどとは言いたくないのも事実だが、音楽の授業への身の入らなさを思えば、隠し通すことは不可能に近かった。

「うん……なんか午前中からお腹の調子悪くって」

「え、文乃も？ 私もお昼食べ終わって後からお腹ゴロゴロしてるんだよね……昼休みもトイレ並んでたから結局行かなかったし」

意外にも、文乃の正面に座りギターを持っている友人もまた、お腹の不調を抱えているようだった。とはいえ、今日だけですでに三度も下痢をした文乃に比べれば、まだ一度も本格的な下痢に苦しんでいない友人の体調は悪いようには見えない。

文乃は小さくお腹をさすった。昼休みに体育館のトイレで排便をしてから、現時点でわずか二十分ちよつと——あまり時間が空いていないにも関わらず、文乃の腸は再び激しく動き出しており、下痢便が少しずつ直腸に溜まり始めているのが分かる。

いつ、再び便意を催してしまうか分からない——そう文乃が思った直後に、文乃の大腸は一気に牙を剥き始めた。

ゴロゴロゴロゴロギューウウツ……ゴオオオオツ！

「……ううっ」

(嘘でしょ……？ うんちしてからまだ二十分しか経ってないのに、なんでもうしたくなるの……？ はあ、お腹痛い、うんちしたい……と、トイレえ……！)

文乃の体内にしか響かない音でありながらも、蠕動の音は確かに攻撃力を持って文乃の直腸へと衝撃を与えた。少量の下痢便だけが溜まっていたはずの直腸に、下痢便の波が押し寄せるとともにガスも直腸内に流れ込んだ。膨らみ、重くなった直腸が一気に垂れ下がって肛門括約筋をこじ開けようとする。椅子に座りながら文乃はお尻の穴を強く閉じることを余儀なくされた。

身体が便器を欲している。これ以上音楽室に止まるわけには行かなかった。一分一秒でも早く、旧校舎の一番奥にあるトイレで、洋式の便器に座って大便がしたい。

「文乃……？ だ、大丈夫……？」

「もう無理……トイレ行ってくるね。一人にしちゃって本当にごめん」  
そう言い残して文乃は立ち上がった。音楽教師のもとに駆け寄って離席の許可を得ると、すぐに廊下に出る。一目散に廊下を駆け、一番奥にある女子トイレの扉を開けた。

そこには二つの便器が存在する。授業中という時間はトイレに来る生徒は基本的におらず、二つの個室は文乃のために開け放たれている。  
……はず、であつた。

(両方、しまってる……？ なんで、なんでなんで)

開いているはずの扉が閉じていることに違和感を覚えた文乃が個室へと駆け寄って、様子を確認する。

まず目に付いたのは、洋式トイレの個室の扉に張られている貼り紙。大きく「故障中」と書かれた紙と、鍵が掛かっていることを示す赤色の錠前は、文乃が最も欲していた洋式便器が使用不能であることを物語っていた。

文乃の視線はそのまま入口側へとスライドし、和式トイレの個室へと移る。こちらの個室には貼り紙こそないが、けれども隣の個室と同様に錠前には赤色が浮かぶ。すなわち先客がいるということ——今は授業中だというのに。

「んぐ……っ。はあ……お腹痛い……」

ピチチチ、ブピッ。ブウツ！ ぶりりりびちびち！

だが、個室の扉が閉ざされている理由は、もはや推測する必要すら無かった。個室を使っている女子生徒は、文乃と同じくお腹を下し、下痢に苦しんでいる。和式便器にしがみつき、茶色の下痢便を便器へと絞り出すその姿は、文乃の頭に鮮明に浮かび上がった。

(そんな……うんちしてる……。どうしよ、でも他にトイレなんてないし、空くまで我慢しなきゃ。はあ……う、うんちしたい……)

グギルルルルゴロゴロゴロ！ ピー……！！

うんちが我慢できなくて音楽室を離れたのに、まだうんちを我慢しなければならぬ。目の前の扉が示す現実が、文乃を余計に苦しめる。それでも文乃に許される選択肢はたった一つ、目の前にある唯一の便器が開放されるその瞬間まで、我慢をするほかにない。けれどもその瞬間がいつ訪れるのかは、文乃にも、そして先客ですらも知るところではなかった。

個室から響き続けている音に、文乃は耳を澄ませている。破裂音が途切れ、聞こえなくなるその瞬間を、文乃はただ待ち望む。

ブジュルルルルッ……ブビッ……ビュルッ……

(音、弱くなってきたかな。そろそろ空いてくれてもいいよね)

……ブッ！ ブビビビビィ~~~~ピチピチブウッ！

(はあ、まだうんち出るの……？ いい加減終わらせてよ……)

先客が排泄をする波の強弱が、文乃にとってはもどかしくて仕方が無かった。排泄音が弱まる度にトイレが空くことを期待し、けれどもその直後に排便が再開する音を聞いては絶望する、一喜一憂を繰り返している自分が情けない。だが僅かな希望に縋らなければならぬらしく、文乃は追い込まれている。

ゴロロロロオオッギユルギユルルルッ！！

(う……っ、来たっ、うんち我慢……我慢がまん……)

今度は文乃が便意の波に襲われる番だった。大腸の中で液状の大便が波を打ちながら出口に向かって押し寄せ、その全てを受け止める直腸がより一層重くなる。下痢便をなみなみと蓄え、その隙間にガスも溜め込んでいる直腸はパンパンに膨らみ、重力の力を借りながら肛門括約筋を執拗に攻撃する。

文乃は身を悶えさせながら必死に耐えようと努めていた。彼女の身体が欲する便器には未だたどり着けていない。尊厳を守るためにはまだ、出口を開くことは許されない——だが震える肛門括約筋はすでに限界そのものだった。最後の排泄から三十分経過していない文乃の肛門は緩みきっている。尻の力だけで直腸の猛攻に耐えることは、事実上不可能に等しかった。

(うんちしたいうんちしたいっ！！ だめ、このままだと漏れるっ！！)

文乃は咄嗟に両手を尻に回し、最大限の力で尻の穴を押さえつける。開こうとする穴を、肛門括約筋と、両手で必死に塞いだ。行き場を失った下痢便とガスが腸内で暴れ回り不快感と痛みを発するが、それでも文乃は我慢することを諦めない。

ぶっ……ぶぶぶっ……。ぶうーっ、ぶううっ！

(おなら、出てる……。っ、すごく臭いっ、下痢のうんちのにおいがする……。だめ、漏らすのは、だめ……)

それでもなお完全に隙間を塞ぐことはできず、尻の穴は震えながら少量のガスを外に噴き出した。ショーツの中に熱が籠もり、数秒の間を空けて臭いが文乃の鼻腔に立ち上る。

それでも——それでも文乃は、最悪の事態を回避することに成功した。永遠にも思える三十秒近い時間が過ぎ、ゴポゴポと音を立てて便意の波が僅かに引き下がる。かろうじて、両手の力を借りずとも文乃は尻の穴を閉じることができるようになった。

(なんとか……はあ、はあ、なんとか、耐えた……でも……)

——次の波が来たら確実に耐えきれない。

文乃を確信させるほどに強烈な便意の波は、次の大波で確実に文乃の肛門を蹴破るという最後通牒でもあった。肛門括約筋を締め上げるのに加え両手で尻を押さえるという総力戦でもなお放屁を我慢できなかった文乃は、次の波に襲われれば確実に肛門が決壊し、尊厳を失うことになるだろう。

なんとしても、それだけは避けなければならない。文乃は意を決して目の前の扉を叩き、先客を急かす他になかった。

コン、コン。

「あの……急いでもらえませんか……？ お腹が、痛くてもう我慢ができません……お願いです……」

弱々しく文乃は先客に願ひ出た。個室の中に衣擦れの音が聞こえるくらいに何度も何度もお腹をさすり、次の大波が襲い来るのを一秒でも遅くしようと必死に努めながら、先客からの返事を待つ。

#### 4 午後一時三十四分

ところ変わって、本校舎の中学一年生の授業が行われている教室は、少し異様な雰囲気包まれ始めていた。三名の生徒が欠席しているのは大きく問題ではないものの、問題はノートや教科書が置き去りにされたままになっている席が三つもあること——授業が始まって十四分間の間に、このクラスでは三人の生徒がトイレに離席していた。そして彼女たちは未だに誰一人として戻ってきていない。

そして今——四人目となる女子生徒が、離席しようとしている。

ギルルルッ、ゴロロロロ……ぐうううっ！

(お腹痛い……なんでだろ。化学の授業の時もちゃんとお腹スッキリするまでウンチしたはずなのに……)

教室の真ん中で、篠原早織はこの日三度目となる便意に悶え苦しんでいた。一度目は自宅で、そして二度目は旧校舎の洋式トイレで、それぞれ下痢をした早織のお腹は、やはり三度目の便意となる今回もしっかりと下っている。ドロドロに溶けた下痢便が直腸の中に溜まり、先ほどから早織の肛門を何度もこじ開けようとしていた。

できれば、離席して腹痛を周囲のクラスメイトに知られるようなことは避けたい。そうでなくとも、すでに三人が離れているこの状況で離席を申し出るのは勇気がいる——だがその一方で、下つてしまったお腹はもう、早織の意思だけではどうにも止められなかった。この苦しみから解放されるためには、トイレに行つて腹の中身を便器にぶち撒ける以外に手段が残されていない。

教室の前方では国語の教師が授業を進めている。百人一首の和歌の説明をしているが、早織はもう説明をともに聞いてもいなければノートに書き取ってもいなかった。右手は常に腹に添えられ、頭の中はトイレに行くことと大便を我慢することではいっぴいになっている。(誰か戻ってくるまで待とうと思っただけ……こ、これ以上はウンチ我慢できない、トイレでウンチしたい！)

ゴロゴロッ……ぎゅるぎゅるるるる……！

教室で便意を催し始めてから四度目となる腹の音が、早織にとつての限界点だった。すくりと立ち上がり、教壇で黒板に説明を書いている教師の下に駆け寄る。

「先生……お、お腹が痛いので、トイレに行きたいです……」

「篠原さんも……？ はあ、良いですよ。一人で大丈夫ですね」

「はい……すみません……っ！」

ため息をつきながらも離席の許可を与えた教師に頭を下げてから、早織は教室を飛び出した。目指す先はただ一つ、廊下の一番端にある女子トイレ。三人のクラスメイトが用を足しているのは確実だが、それでも今の早織にはそこに飛び込む以外の選択肢はなかった。

(これだけ戻ってこないってことは、三人ともお腹壊してウンチしてるんだよね……音、聞かれちゃうかもしれないけど……お腹痛いときは、仕方ないよね……うん)

恥ずかしさを押し殺すためにもそう自分自身に言い聞かせながら、早織はトイレへと足を急ぐ。トイレへと向かう間にも便意はより一層切迫し、トイレの入り口が見えてくる頃には大便が今にも漏れそうなくらいに便意も膨れ上がっていた。

「あとちょっと……あとちょっとだから……い、一番手前の個室ならすぐ入れるよね」

このときまで早織は、自分自身がこれで今すぐ便器に座ることができると信じて疑わなかった——いや、授業中のトイレで、そうでないことを想定することは無理に等しい。

だからこそ。

——ビチビチビチビチッ！ ドボドボッ、プチュプウーッ！

——ビジャビジャ！ ブウッ、ブリリリ……ビチビチッ！

閉ざされた八つの個室から響き渡るめいめいの激しい脱糞音と。

「んくうっ、はあ、ふううんっ……！」

「はあ、うう……ん……！」

その扉の前に並び便意を我慢しながら、激しく何度もドアを叩いて先客を急かし続ける同年の女子生徒たちを見て、思わず早織は足をすくませていた。

「なんで、どういうこと……？」

トイレの中で目に入るのは、扉の前で悶え苦しんでいる女子生徒たち——普段のように一列に並ぶフォーク並びにはならず、それぞれが扉の前に並ぶという秩序の乱れた列形成が印象に残る。その中に一人、クラスメイトの女子を——つい三分ほど前に教室から出て行った、三人目の離席者である女子を見つけ、早織は状況を理解した。

(みんな、お腹壊してる……トイレ使ってる子もお腹痛いから、どこも空かないんだ。だから個室の前にみんな並んでるのかな……わ、私もどこか並ばなきゃ)

この空間にいる女子生徒たち——個室を使っている八名と、その前

に列を作っている七名は、全員お腹を壊している。早織も含めて十六名、このトイレにはお腹を壊した中学一年生の生徒が集まっている。早織はすぐに、まだ生徒が並んでいない個室があることに気がついた。左手の列にある一番奥のトイレ——誰もが知っている和式トイレ。順番を待つ女子たちも、和式を使いたくなくて選んでいないのだろう。早織だってもちろん、お腹が痛いのでから使いたくない……だがそこに並ばなければ、どこかの個室で二番目に並ぶという、さらに時間の掛かる展開が待っている。

早織は迷うことなく和式トイレの個室の前に並んだ。隣の個室のすぐ前では、他のクラス的女子生徒がお腹をさすりながら足踏みを繰り返している。お腹を下して便意を我慢しているのはすぐに分かった。向き直った早織の目の前には一枚の扉と、錠前に浮かぶ赤色の印。他の個室と同様にノックをして声を掛けようかと思った瞬間、個室の中から大きな排泄音が響く。

ブリブリブリビチビチッ！ ブブッ、ブビィ……ブウー……ッ！  
（そっか……和式だから、音が響くんだ……。ううっ、お腹痛そうだけど、私だってお腹痛いし、ウンチしたい！）

——コンコンッ！

「あのお腹痛いから……急いで欲しい、です……」  
「……ごめん、分かっているけど、私もお腹痛くて、入ったばかりだから、まだ、ちょっと……っ！」

ブチュルルルルルルポトポトポトッ！

人気の無い和式トイレの個室が埋まったのは一番最後のこと。それ故に他の個室と比べても、先客がトイレを使っている時間はさほど長

くない。一番最初にトイレに駆け込んできた生徒はすでに第一波の排泄が終わり第二波の便意と格闘しているところだったが、一方で早織が並ぶ和式トイレを使っている生徒はまだ、第一波すら乗り切っていない状態だった。

長期戦を覚悟し、早織もぎゅっとお尻の穴を閉じると同時に、お腹をさすり始める。どの個室の前でも似たような状況だった。苦しい波に襲われている生徒が目前のドアをしきりにノックし、そうでない生徒はじっと便意を我慢している。

それから少しの間、新たな生徒の来訪もないこの女子トイレは、まさしく膠着状態だった。トイレを使っている八人の女子生徒たちは誰一人として排泄を終えられる状況になく、各々の尻から猛烈な排泄音を響かせ続けている。それを聞いている八人の生徒もまた、尻の穴を閉じながら懸命の我慢を続けていた。

「ふうーっ……。はああ、っ……」

グリリリリリッ、ゴロゴロオオオオッ、グギュルルルッ！  
（ウンチしたい……。下痢の、ウンチがしたい……。で、でも他の子もみんな我慢してるし……とにかくこの和式が空くまで我慢するしかないよね……。うう、ウンチしたいよ……）

周囲を見回しても、誰もが同じ状況だった。左右それぞれの個室に沿って並んだ四人の女子生徒が、お腹を押さえながら目の前の扉を見つめ続けている。

「早く……早く出て……」

「やばい、やばい漏れる……っ」

「はあ……はあ、うう」

小聲ながらも先客を急かし続ける者、弱音を漏らす者、もはや何かしらの言葉を発する余裕すらない者——状況は様々であったが、誰もが便意を堪えているという一点においては同じだった。皆、目の前の扉が開かれ、便器が開放されるその瞬間を待ち続ける。

だが、先客たちはまだ、誰もその状況になかった。早織が並ぶ個室からも、そしてその隣の個室からも、止まることのない排泄音が響き続けている。排泄をすることはいっぱいになっている先客たちもまた、早織たちという順番待ちの生徒のことを考える余裕はない。

「うう……お腹痛い……まだ出る……っ！」

「出るっ、出ちゃう……もう我慢できない、早くしてえ……！」

この空間にいる誰もが苦しんでいた。便器を使っている八人の女子たちは、腹痛と止まらない便意に苦しめられている。だがそれ以上に、個室の外にいる早織たち八人は、猛烈な便意の我慢というさらに苦しい戦いを強いられていた。

そこへさらに、新たな生徒たちがなだれ込んでくる。一人ではなく、複数の女子生徒が、やはり例外なく腹を抱えながら入ってきた——彼女たちは困惑しつつも、観念したように個室の前にできた列に並んでいく。一人だった列が二人に伸び、次々と生徒たちがトイレにやつてくる中で、ついに早織の後ろにも他のクラスの女子が並ぶ。

「あの……大きい方、だよね……。お腹痛いんだけど、先に入れてもらったり……なんて、できないよね……」

「ごめん、私もお腹痛いの我慢して……中の子もお腹壊してるみたいだから……ほんと、ごめん……」

「ううん。大丈夫、我慢する……」

早織の後ろに並んだ女子が抱いていた小さな希望は、あっさりと崩れ去ることとなった。他の個室の列でも同じようなやり取りが行われており、けれども誰一人として、後から並んだ女子に順番を譲ることのできる女子はいない——皆、お腹が痛くて大便を我慢している。

狭い女子トイレの中にいよいよ異常な空気が漂い始めていた。この空間の中で、大便を我慢している女子はすでに十八人いた。個室の前には二人、或いは三人の順番待ちの列ができていく。そこへ新たな女子がやつてきては、困惑しながら短い列を探して最後尾に並び、無意味な順番交渉をする。その繰り返しだった。

（ううっ……ウンチ……。ウンチしたい、トイレでウンチしたい）

ゴロゴロゴロゴロ、ギョルギョルゴボゴボゴボ……ッ！

時間を追うごとに、個室の中での排泄も少しずつ終息に向かう。だが同時に、空くのを待つ早織の腹具合も限界が近づく。個室の中の音が止まるのを待ちながら、早織は必死にお腹をさすり、便器にしゃがむことができるその瞬間を待ち望んでいた。

誰もが皆、同じ状況にある——だが、その均衡が崩れる瞬間が訪れようとしていた。

——ゴボボボボッジャアアアアア……ッ……

「……っ!？」

一つの個室で水が流れる音がある。全員の意識がそこに向けられた。待つこと数秒、金属音とともに、一つの個室の錠前が赤色から青色へと変化した、中から顔色の悪い女子生徒が出てくる。

「……えっ?」

「どいて、どいてどいてっ!!」

困惑する先客の女子を尻目に、その個室で先頭に並んでいた女子が個室に向かつて懸けだしていく。乱暴に扉が閉じられ、衣擦れの音がしたかと思えば、その直後には爆発的な音が響き渡る。

ブリブリビチビチビチィッ！ ブブツ、プビィ、ブウー……ッ！  
「あああああ……っ！ はあああ……っ、んんんっ！」

いったい彼女は何分間、壮絶な我慢を繰り広げてきたのだらうか。どれほど調子の悪い大便が彼女の腹の中には溜まっていたのだらうか——だが彼女はその腹の中身をきちんと体内にとどめ続け、我慢という苦闘を制した、紛れもない勝者であった。入れ替わった個室に向かつて向けられる、残された女子たち——敗者になる可能性が現実味を帯びだした者たちが、羨望の視線を向けた。

その中にはもちろん早織も含まれている。空いた個室に駆け込んで大きな音を立てながら排泄できているのが、もし自分だったら……そう考えずにはいられなかった。

グルルッ……グルルグルルッ……：……ぶりりりっ！

(良いなあ……うっ、ウンチの音聞いちゃったら、余計にお腹が) 他人のことなど気にしていられないとばかりに、早織は正面を向き直る。目の前にある扉の向こうからは、相変わらずビチビチという音が響いているばかりで、先ほど聞いたような水を流す音どころか、紙を巻き取る音すら聞こえてこない。

トイレの中は再び元の張り詰めた空気が戻りつつあった。個室に入れたかった七人の女子たちは未だに苦しみのさなかにある。たった一つ空いた個室で二番目に並んでいた女子は先頭に立ったが、いつ終わるとも分らない激しい脱糞音を聞かされながら、自身の苦しい便意

を我慢することを強いられ続けている。一人が個室に入った以外、誰の状況も変わっていないように早織には思えていた。

だが——一度崩れだした均衡は、もう元には戻らない。  
ギルルルゴォー……ッ！ ゴログウウウウウウッ！

誰かの腹から、どの女子生徒よりも激しく大きな鳴動が響き渡った。その直後に、一人の女子の金切り声が響き渡る——再びトイレの中の意識が一点に集中する。早織の二つ隣、入口側から二番目の個室に並んでいた女子だった。

「代わって、代わってえええっ！ もう我慢できないのおっ！」

彼女の手はもう腹には当てられておらず、右手で尻を必死に支えている状態だった。背筋を目一杯に伸ばし、スカートの上から尻の肉を中央に寄せ合わせて、出口を塞ごうとしている。それでも耐えられない苛烈な便意の波が、彼女を襲っていた。

両手を尻に当てている彼女はドアを叩くことすらできない。ありったけの力で叫び、先客を急かそうとするのが精一杯だった。

「ごめん……なさい……ッ！」

ブリュリリュリリュリリュッ、プビビビッ……！

だが、彼女が並んでいる個室では、まだ先客が下痢に喘いでいる。先客の尻から響く爆発音は、彼女が抱いていた最後の小さな希望を、容赦なく、根元から刈り取った。

「ううううっ、ふうううう、ううう……ふうううっ！」

息を吐きながら彼女は必死に耐えている。膝がガクガクと震え、尻に当てている両手にも力が入らないのか、何度も何度もスカートの布地を掴み直す様子が早織の目にも映った。



彼女は必死に耐えている。彼女が、先に入れ替わったあの個室に並んでいれば、今頃はこのトイレもまだ平穏がかるうじて保たれていただろうか。或いはいつそのことまだ誰も入れ替わっていないければ、彼女が後ろから響く気持ちよさそうな排泄音に刺激され、お腹を激しく痛ませることもなかっただろうか。

だが現実とは異なる。彼女の限界はもう、目と鼻の先だった。

「うう、ううっ！ ダメ、ええええええええ……えっ！」

プビビビビビッ、ブウッ、プブブウッ！ びちびちちち……。

九つ目の破裂音は、空間をつんざくような八重奏に比べて、ずいぶんと柔らかい破裂音だった。狭い空間の中で液体と気体が入り交じるくぐもった音と、液体が溢れだしていく音が、彼女のスカートのなかから響き出す——その音の数秒後には茶色の筋が彼女の尻から垂れ落ちていき、両足を伝って床へと向かう。

並び初めておよそ十分。早織とは別のクラスの女子は、列の先頭で力尽きた。洋式トイレの個室の扉を前にして、けれども聞くことのなかった扉を前に、彼女は敗北者となった。

（嘘……。漏らしちゃったの……？ で、でも……お腹が痛かったら、いつまでも我慢できるわけじゃないし、私だってどうなるか……）

泣きながらその場に崩れていく彼女の姿は、周囲の人間にとつては恐怖そのものだった——特に行列の先頭に立つ女子たちからすれば、数分後の自分たちの姿に他ならない。このままトイレが空かなければ確実に漏らしてしまうだろう。ついに具現化してしまった最悪の可能性が、彼女たちの恐怖を駆り立てた。

再び、ドアのノックが始まる。より一層怒気に満ちた音だった。

「お願いっ、開けてええっ！」

「漏れる漏れるっ、早く代わってよおっ！」

「もおーっ！ これ以上は無理い……っ！」

早織の周囲で壮絶な叫び声が聞こえる中、早織だけは一人、お腹を抱えたままじっと、目の前の扉を見つめることに徹していた。その扉の奥からは、周囲の叫び声によって隠されることなく、排泄音が響き続けている。この音を聞くだけで、どれほどノックをしても無駄だというのが早織には容易に理解できた。

（ずっとビチビチしてる。お腹痛いんだ……いくらノックしても絶対出てきてくれないよね……お願い……急いでね）

心の奥で先客に祈りを捧げる沙織とは裏腹に、残る少女たち——七つの洋式トイレの個室に並んでいる女子たちは、激しいノックが続けている。相変わらず大半の個室からは脱糞音が絶え間なく響いていたが、時間の経過が少し状況を変えたのだろうか。

ほんの僅か——一部の個室だけ、動きが見られた。

「……もうすぐ、代われると思う……」

「拭いたら出るから、あと少し頑張って……」

左右それぞれの一番入口に近い個室。早い段階で埋まった二つの個室を使っていた女子生徒たちはようやくお腹が治り、後始末を始めようとしていた。二人の女子がトイレに籠もっていた時間は、それぞれ十九分と二十一分——壮絶な排泄の末に、ようやく二人の先客が出ようとしている。

一方で、残された個室の生徒たちは、先客のビチビチという排泄音を聞かされながら、それをじっと見つめるのみ。

……ではなく。

「ねえ、貴女私より後に来たでしょ!？」  
「お願い先に入らせて、私お腹痛くてウンチ漏れそう、限界なのっ!」  
「ねえお願いお願いっ!!」

「無理っ！こっちだつてずつとうんち我慢してんだからこれ以上耐えられる訳ないでしょ!？貴女はそっちが空いたら入れば」

「空かないからお願ひしてるのおっ！ 一生のお願ひだから！ 尾根が利します、十秒で良いからウンチさせてよお……」

「そんなこと……あ、空いたから入らせてよ、離してっ!!」

早織が並んでいる左側の個室とは対面の右側の個室では、ひと悶着起こっていた。空きそうな個室の先頭に立っていた女子生徒と、その隣の列で我慢を強いられている女子生徒の言い争い——だがトイレは順番通り、空いた個室に並んでいた生徒が入っていく。ほぼ同時に空いたもう一つの個室でも、言い争いの現場を哀れみながらも先頭の女子生徒が入っていく。

「ねえお願い……お願いだってばあ……」

残された彼女を尻目に、個室からは二つの衣擦れの音が聞こえる。衣類を同時に脱ぎ終えた二人が座り込んで、彼女をあざ笑うかのような排泄音がトイレに響き渡った。

— ぶ り ゆ る る る る る つ ぶ り ぶ り ぶ り ぶ り ！ —

——ブチュブチュビチビチビチビチブボボッブウウツ！

「うう……うう……あ、あああつ!？」

残された彼女がひととき大きな声を上げて悶え苦しむ——だがそれは、単に空いた個室から気持ちよさそうな排泄音が聞こえたから、というだけではなかった。

「漏れる……漏れるっ、嫌だ、うんち、漏れる。漏れる……っ」

うわごとのように同じ言葉を繰り返す彼女は、もうすでに限界を超えていた。恥も外聞も捨てて隣の個室の同級生に順番を交渉するくらい、彼女は追い詰められていた——しかし現実は無情であり、彼女の目の前にある個室は決して空かない。

閉ざされたままの個室に倒れかかり、右肩を預けながら彼女はとうとう限界を迎えた。

「もう、だめっ……」

ビチチチ……ブ  
ビツ……ビ  
ユウーツ!!  
ブ  
ウツ!

その音は個室から響き、散々聞き慣れた音でありながら、けれどもどこか本質的に異なる排泄の音。出してはいけない場所に大便を出してしまつた彼女が泣き崩れていくのを、誰もが憐憫の視線で見つめることしかできなかった——その視線もすぐになくなり、彼女は一人、床にうずくまりながらショーツを汚していくだけの存在になる。

トイレの中にいる生徒の数はすでに三十人に達しようとしていた。早織の後ろに並んでいる生徒もさらに増えて三人となっている。誰もが大便を我慢し、苦しみ、喘いでいた。己の一分一秒を耐え抜くのに必死になっている彼女たちに、すでに漏らしてしまった同級生を気にかける心の余裕はない。

我慢を続けた生徒たちのうち　我慢という苦行から解放されるに至ったのは、空いた個室に入った三人と、失禁に至った二人の合わせで五名のみ。早織を含めた大半はまだ苦しみのさなかにあり、彼女たちの命運を決めるのは、自身の肛門の耐久力と、目の前にある個室を占拠している先客の腹具合——その二つのみが変わ数だった。

## 6 午後一時五十三分

学園中を襲う腹痛からは、当然ながら体育館で授業を受けている生徒たちも逃れることができなかった。一枚の壁のように固く閉ざされた五つの扉の前で、十数人もの生徒がすでに力尽きている。体操着を着用したまましゃがみ込んでしまった女子、衣類を汚すことを嫌いハーフパンツを下ろして壁沿いにしゃがんでいる女子、尻を押さえたまま立ち尽くしてくぐもった音を奏でている女子——内側から湧き上がる暴力的な欲求に敗北した生徒たちの様子は様々だった。

床面積の半分近くを占める茶色とその上に情けなくしゃがみ込む女子たちの姿は、まさしく死屍累々といった状況である。その中でまだ、必死に尊厳を保とうと抗っている一人の女子がいた。

ゴギョルルルルゴロゴロゴロゴログオオオオオオッ!!

「ふうううーっ……。ふうううううっ!」

痛む下腹を右手でさすり、左手で尻を抱えながら、まだかろうじて下着を汚さずに耐えている高校二年生の女子——高坂茉莉は、今にも限界を迎えそうな形相を浮かべながらも、強烈な便意の波を末だに乗り越え続けていた。五つ並んだ個室のうち中央の個室に並んでいる茉莉の左右では、すでに先頭も、その後ろに並んでいた女子もすでに力尽きている。茉莉の我慢は、とつくに二十分を超えていた。

(ウンコ……ウンコしたい……っ! 我慢、我慢しないと……)

茉莉の肛門が、重くなった直腸を支えている。開きそうになる校門が閉じられ続けているのは、当然ながら茉莉の根性の賜物でもあり、

けれどもそれ以上に、直腸の先端部分に溜まっている固形の大便が、茉莉の肛門が開いてしまうことを防いでいた。

(ウンコが出る……。下痢のウンコと、便秘のウンコが両方混ざって……うう、出そう……早くウンコさせて……)

もともと空っぽだった直腸に下痢便がなだれ込んだことであつという間に限界を迎えた大半の女子生徒たちと違い、茉莉の直腸の先端には水分を過剰に吸収された便秘の産物が残っていた。朝の排便時に出し損ねてしまった代物であり、午前中の間ずっと下腹に違和感をもたらし続けた諸悪の根源である。

だがそのおかげで茉莉はまだ、最悪の事態たる決壊を迎えずに済んでいた。今にもその尻からは下痢便が溢れ出しそうでありながら、固形の大便は栓となつて出口を塞いでくれている。体育の授業中に便意を催し、けれども満員となつていたトイレに並び始めてからの二十分間は、その固形便が生み出した時間的猶予に他ならなかった。

茉莉は長い間、耐え難い便意を我慢し続けている。目の前にある扉を見つめながらじつと、茉莉は腹の中で暴れている下痢便と、それを押さえつけている固形便を便器にひり出す瞬間を待ち続けていた。

「はぁーっ、ふううう……」

ゴロゴロゴロゴッ、ギョルギョルギョルピーー……ッ!

だが、個室の中にいる先客は、その二十分の間、一瞬たりとお腹の具合が改善したそぶりを見せていなかった。幾度となく聞いた破裂音が、今も扉の向こうから響き続けている。腹を下している生徒が大量発生している中、よりによって茉莉が並んだ個室の先客は、特に酷く腹を下していた。

(ここだけ空かないから、いつまで経ってもウンコができない……)

その二十分間に、他の個室では先客が用を足し終え、どの個室でも少なくとも一人の別の女子が便器にありついていた。そして茉莉のすぐ後ろでは、彼女よりも後に並んだ別のクラスメイトが、彼女よりも早く限界を迎え、その足下に茶色の湖を作っていた。

地獄のような世界を、茉莉はそれでも生き抜いてきていた。何度も何度も開きそうになった肛門を茉莉はその度に全力で引き締め、その中に暴れる液状の大便を、一滴たりとて外には漏らさなかった。

だが、鋼鉄の門番も——二十分間という尋常ではない時間を超え、とうとう限界を迎えようとしている。

ぶすすう~~~~ぶりぶりっ ブウウッ! プビビビッ!!

出口に鎮座する固形便の隙間を縫って、腸の中で発生した熱いガスが噴き出していく。栓となっている大便は便秘の産物とはいえ、その奥でうごめいている液状の大便は、下痢によってもたらされたもの。異常な腸内環境から生み出されたガスは臭く、下痢に特有の酸味を帯びた発酵臭を放っていた。トイレの中にはすでに悪臭に満たされているはずなのに、自身が生み出した臭いは格段に強く感じられる。

——コン、コン……。

茉莉が左手を下腹から離し、目の前の扉を叩く。同じことを繰り返して何度目になるか、もはや分からない。だが、いくらドアを叩いたところで、先客の同級生からの返事は決まって同じだった。

——ごめん、まだ……お腹が痛くて……。

(お腹痛いのは、分かっているけど、それは私も同じなの……私だってウンコがしたいの……っ)

扉の向こうから聞こえ続けている音を聞けば、彼女がお腹を下して下痢に苦しんでいるのは火を見るより明らかだった。それでもなお、茉莉が扉を叩くことを止めないのは、ひとえに茉莉自身もまた大便がしたいから。足下にある和式便器を欲しているのは彼女だけではないということ、茉莉は必死にアピールし続けている。

その訴えが——とうとう実を結ぶ瞬間が来ようとしていた。

「ふう……。ごめん、そろそろ出るね……あとちょっと待って」

「……え」

他の個室から響く音と大差ない大きさの排泄音を響かせていた彼女は、しかしその声から程なくして、排泄を終わらせていた。トイレレストペーパーを巻き取る金属音が、トイレの空く瞬間が近づいてきていることを教えてくれる。茉莉がお尻の穴を締め上げる力が、一段と強くなった。

それからおよそ二分の後——茉莉が並び始めてから実に二十三分という長すぎる時間を経て、ひたすらに閉ざされ続けてきた個室の扉が、遂に開かれた。クラスでも特に小柄な同級生が姿を見せ、申し訳なさそうにしながらお腹をさすり出してくる。彼女は普段からお腹が弱く、刺激によって極端にお腹を下し下痢が止まらなかった……などという事情は、茉莉には関係ない。

開かれた扉の向こう側に念願の和式便器が見える。まだ水が流れている最中のその便器は透明で、すでに次の利用者である茉莉の排泄物を受け止める体制を整えていた。後はもう、個室に入ってその便器を跨いでしやがみ込むだけ。

我慢という壁を乗り越えた茉莉は、足を踏み出そうとした。

ゴギョルルルグリュグリュグリュピィィィッ!!

「んううう……っ、はああああ……ふうううう……っ」

だが、踏み出そうとした右足が、前に動かない。尻穴への圧力は極限に達している。ぎゅうぎゅうに締め上げられた肛門は、僅かな力の不均衡でさえも受け入れられる余裕がなかった。肛門括約筋を収縮させる力が少しでも弱まってしまえば最後、排泄孔は無様にも広げられて下着を茶色に膨らませてしまう——二十分を超える苦勞は水泡に帰することとなり、茉莉もまた他の女子たちと同様に尊厳を破壊され地面に座り込むだろう。

その未来を回避するためには目の前にある和式便器を跨ぐほかにない。便器までの距離はわずかに三メートル、歩数にして七歩。けれども茉莉は、その最初の一步でさえも踏み出せない。

(トイレ、いけるのに……歩いたら、ウンコが……出る……っ!)

強烈な便意の波に抗うためには、足をピタリと閉じ、全神経を集中させなければならない。足を僅かでも動かせば茉莉の肛門は決壊してしまうだろう。右手でお尻を掴んだまま、茉莉は立ち尽くしていた。念願の個室が開いたというのに、茉莉は個室の中に足を踏み入れることができない。

「ねえ、入らないの? 使わないんだったら入れて欲しいんだけど。こっちだってもう限界なの!」

茉莉の後ろ側から怒りを滲ませた声が掛かる。隣の列——という概念はすでに崩壊していたが、けれども声の主である茉莉のクラスメイトもまた、まだかろうじて便意に抗い続けることができていた。彼女もまた、個室の中にある和式便器を喉から手が出るほどに欲している。

「そ、そういう、わけじゃ……今、入る、けど……っ!」

声に押されるようにして茉莉が足を踏み出そうとする。だが僅かに数センチ足を前に動かしただけで、肛門付近の力の均衡は崩れかけた。尻の穴が膨れ上がる感覚が全身をぞわりと震えさせる。茉莉は足を引っ込め、便意の我慢に集中することを余儀なくされた。

空いている個室に一分近く入ろうとしない茉莉を、周囲が怪訝な目で見続けている。周囲からの視線を感じ、そこから目を背けるかのようになり茉莉は目をぎゅっと閉じて左手でお腹をしきりにさすり続ける。グギョルルルルグリュグリュグリュピィィィッ、ゴボゴボゴボ!

(お願い……ちょっとで良いからおさまって……トイレに入るまで、何歩か歩ければそれだけでいいの……)

だが茉莉の願いと裏腹に、暴れ始めた大腸の動きが止まることはなく、便意の波が弱まることもなかった。常に最大級の圧力を維持し続けている直腸は肛門を執拗に攻撃し続け、僅かですらも足を前に動かす余裕を与えてくれはしない。

ぶびびびびびっ! ぶう~~~~ぶりぶりっ!

不意に、大きな放屁の音がトイレの中に響き渡った。閉まっている四つの個室からの音ではない。茉莉の尻からガスが勢よく漏れ出した訳でもない。

その音は——茉莉の後方から響いていた。

「もう、だめえええっ! 我慢できないいいっ!!」

先ほど茉莉に怒りを向けていたクラスメイトは、叫びながら。

「あなたが……入ろうとしないあなたが悪いんだからねっ!!」

——茉莉の目の前で空いたままになっていた個室に、駆け込んだ。



他の個室も似たような状況だった。遙の左手にある和式トイレも、三十分以上の間ずっと同じ女子生徒がしゃがみ続けている。右手にある二つの洋式トイレのうち片方は十五分ほど前に入れ替わったが、もう片方の個室からは水が流れる音がしていない。

——ビチビチビチ、ドボドボドボドボッ！

——ブチュルルルルビチビチビチビチブウー——！！

どこかの個室から勢いの良い脱糞音が響く。直前に誰かが入れ替わった音はしておらず、きつと便器を使っている誰かが強い波に襲われたのだろう。そしてその音はきつと、個室に並ぶ女子たちを絶望の淵へと追いやってに違いない。

だが、このトイレでも、個室以外の場所から排泄音が響きだしている。幾人もの少女があちこちで限界を迎え、肛門を決壊させている。

——ブチュブチュブチュビチビチ！

——ぶびびびびびぶぶりゅぶりゅぶうっ！

便器に座って肛門を全開にしている八人の女子に比べれば、個室の外で限界に至った女子たちの排泄はかろうじて穏やかさを保っていた。羞恥から肛門を全開にできない彼女たちは、排泄と我慢の双方の苦しみから抜け出せないまま、下着や床を汚している。

そんな女子たちを見ながら、限界寸前の便意と戦っている女子生徒たちは、先客に向かって叫び続けていた。ある個室ではドアが激しく叩かれ、別の個室では泣き叫ぶ声が聞こえている。

——ドンドンドンドントツ！

「早く、早くしてえええっ！」

「もうダメ限界、いつまで入ってるのよ……っ！」

この場にいる誰もが限界だった。あちこちで怒号が飛び交っているのを聞きながら、遙は強烈な便意の波を感じ取り、腹に手を当てながら上体を前に倒す。腹を抱え、出口へと押し寄せてくる茶色の水を、便器に向かって勢いよく注ぎ込んだ。そこにはもう羞恥などなく、苦痛から逃れたいという欲求と、目の前で苦しむ女子に便器を譲らなければならないという小さな理性しか残されていない。

ブボビチビチビチビチビチビチビチブブブウウウウウッ！！

ひととき大きな放屁の音が遙の尻から響く。直腸の中に残っていた下痢便とガスの全てを便器へと吐き出すその音は、トイレの中に響く誰の排泄音よりも大きかった。

「んっ……………んっ」

放屁を終えて何度か息む遙の尻の穴は開閉を繰り返すが、そこからはもう下痢便が溢れ出してくることも、ガスが噴出しようとするということもない。やがて遙が力尽きて窄まっていく肛門からはもう、下痢便の一滴すらも出そうになかった。

実に三十九分ぶりに、遙の尻から何も出ない時間が訪れた。腹痛は和らぎ、先ほどまで意識の全てを支配していたはずの便意はもう感じられない。遙はどうやら、腹の中身をようやく出し切ったようだった。(終わった……。早く出ないと……)

地獄のような腹痛と戦い終えたのだから、少しは爽快感の余韻に浸りたいところである——だが扉の先では今も、この便器を欲して懸命の我慢を続けている女子がいる。遙は急ぎトイレレットペーパーを巻き取り、尻の穴を拭き上げた。

四十分ぶりにショーツを穿き、水を流して鍵をスライドした——

ゴロロロギユルギユルピーーーーーッ………！

——ガチャッ。

腹が突如として痛み始め、直腸に液体が流れ込む。空っぽになつたはずの直腸は、三分としてその状態を維持できなかった。身体が猛烈に便器を欲している——その便器は、遥のすぐ後ろにある。

だが、彼女の右手に握られている鍵は、ちょうど真横にスライドされて個室の外に向かって空室を示していた。